
血の盟約

西園寺ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血の盟約

【Zコード】

N8708G

【作者名】

西園寺ルイ

【あらすじ】

化け物に襲われたあたしを助けてくれたのはバンパイアの男だった。けれど、そいつ……あたしの命を助ける代わりに「お前の血を一生俺に捧げる」なんて言つてきた。冗談じゃない！って思ったのに、気づいたら後先考えず承諾していました……。でも仕方なかつたんです。

数奇的な出会い（1）

奇怪な事件が起きた。

血が全て抜き取られた状態で遺体が発見されるという不可解な事件。殴られたり斬られたりの外傷は無く、ただ血液だけが失われている。そして発見された遺体には、決まって一ヵ所針みたいなもので刺されたような痕跡が残っていた。

それを魔の仕業だと騒ぐ者もあれば、疫病だと言つ者もいた。原因が分からぬまま犠牲者が増えるばかりで、得体の知れない怪事件に人々はただ恐れおののいた。彼らはまだ「ソレ」の存在を知らなかつたから。

「最近物騒よねえ……」

親友のカトレアがジャムサンドを頬張りながら呟いた。赤毛でくせのある長い髪が前に垂れてくるのか、片手でおさえながら食べている。

「あの事件のこと？血が抜き取られた状態で遺体が沢山発見されるってやつ」

「そりそり、それそれ。魔のせいだと疫病だと言われてるけ

ど、実際どうなかしら。誰かが手のこんだ殺人をしてるとも考えられるし、もしかしたら血を吸っちゃう獣とかがいたりしてね。原因が分からぬのが怖いわ。ねえ、ナタリーはどう思う？」

「どうと言わても…。実際血を抜かれた死体を見たわけでもなく、ただ人から人へとロゴミで伝わってきた話だから何とも言えない。「怖いとは思うけど…ちょっと分かんない。だつて実際に見てないし」

自分の目で確認したこと以外あまり信じないナタリーは、恐怖心というものが湧いてこない。

「相変わらずねえ」

カトリアは長年付き合つてきてるナタリーの性格をよく知つていてから、今回の事件のことも特に変わりなく話す彼女に感心した。村の人はみな恐怖しているというのに。冷静といふか合理的というか。

「ナタリー、私そろそろ家に戻るわ。手伝いしなきや」

「うん、わかつた。頑張つてね」

親友に手をふり、別れを告げるとナタリーも家へと戻つた。

ナタリーは石造りの家に一人で住んでいた。両親も一緒に住んでいたのだが、二年前に両親が旅行に出かけた時、ちょうど両親が乗つていた馬車が激しく転倒、そのまま二人は帰らぬ人となつてしまつた。たまたまナタリーはカトリアの家に泊まつっていたので、ナタリーだけは無事だったのだ。

一人で生活するようになつてからはや一年。ナタリーにはずっと欠かさずに続けてきたことがあつた。亡き両親の冥福を一日一回祈るのだ。朝起きてから一回、寝る前にも一回、必ず十字架に祈る。亡き両親に一日の出来事を話したり、元気にやつていますと報告したりした。

そうすることによつて一人の寂しさをまぎらわそうとしていたのかもしれない。

ナタリーは帰つてくるやいなや、両親の形見にしている十字架に挨拶すると、再び外へと出かけていった。

外は気持ちのいい曇下がり、村は陽気に包まれてぽかぽかと暖かい。広大に広がる田畠や、ところどころ家が集まつて集落ができる。この村は自然に恵まれていて非常に美しい。

ナタリーはこの村が大好きで、特にこれからいく場所はもつと好きだつた。村のはずれ、少し森の中に入つていくとそこには古い教会がある。

今は使われていないが、森の中にひつそりと建つ教会のステンドグラスは見事なもので、ナタリーはそれを見たくてよくここへくる。光輝くステンドグラスが心を喜々とさせてくれるから。

片方の扉がはずれてしまつて、壊れていらない方の扉をキィと音をたてて開けると、誰もいないであろうと思つていた教会の中に人がたつていた。教壇のちょうど手前あたりに、全身黒ずくめの長身の男の人。後ろ姿だから顔は分からぬ。

「誰だろ？…。いつもはこんなところへくるのは自分くらいなのに。村人の誰かかもしれない。」

「……あの…あなたもステンドグラスを見にここへ？それともお祈りですか？」

努めて明るい声で話しかける。ところが教会の中で立ち尽くす人は、答えるどころか振り向きもしない。

聞こえていないのだろうか。

「あの………、旅の方ですか…？」

すると長身の男は首を少し左に傾けて、

「お前は村人か？名は？」

と聞いてきた。

人にものを尋ねる時は自分から名乗れ、と思ったが、少し高慢そうなそれでいてよく耳にとある心地良い低音にそんな感情は打ち消されてしまった。

「私はナタリーです。ナタリー・ライアード。あなたの言つとおりすぐそこの村人です。あなたは？」

男はフンッと鼻をならすと、

「人間に教える名などない」

と言つた。

人に名前を尋ねといて自分は名乗らない、その上人を小馬鹿にした失礼きわまりない男の態度に腹がたつ。

しかも

「人間に教える名などない」とか、まるで自分は人外の者であるかのようないふし方に変な人に会つてしまつたと後悔する。こういう人には極力関わらないほうがいい。どうやら村人では無さそうだから、ナタリーはさっさと村に帰らうとした。「じゃあ…私も帰るんで。さよなら」

一応相手の失礼にならないようにお辞儀した。変な人に絡まれないようにするには、無視するか自分が身をひくかしておかないとけないと思つたからである。

ここで相手の高慢な態度に腹をたてて何かされたのではたまつたもんじやない。

後ろを振り向いて教会の出口を田指そつとした時、ドンッと何かにぶつかつた。

「痛つ」

教壇の前にたつていた男だ。

いつの間に回りこんでいたんだろう。

尋常じやない速さだ。

「な…何ですか。我家に帰るんで。そこぢいて下さ」長身の男を見上げる。

そこについたのはひどく美しい顔。

肌は透き通つたように色白で、蒼白に近い。

漆黒の髪が揺らめいて、前髪が目にうつすらとかかつている。そしてなによりも驚いたのは瞳の色。

赤い、妖艶な光を放つていて。

「お前はここに何しにきた

男の声にハツとする。

「…ステンドグラスを見に…でも、もう見たからいいです。そこで
いて下さい」

村人でもなく、旅人にしては荷物の一つも持たないこの怪しい男と
関わってはいけない、と思い男を避けて帰ろうとする足止めをく
わされる。

「待て。お前から血そな匂いがある」

「…食べ物なら持つてません。あなたの氣のせいじゃないですか」
つぐづくおかしな事を言う男にナタリーは少々苛立ちをみせながら、
足早に出口へと向かつた。

「血そな匂いがするのは、お前の血だ」

血、という単語に足がとまる。

今なんて…？血が美味しそう？何言つてゐるの。

ふと頭に怪事件が思い浮かぶ。血が抜き取られるといつ怪事件。
男がゆっくりと近づいてくる。

ナタリーは後ずさつた。

じわじわと距離をつめられて、背中が壁にトントンと音たててついた。
気づくともう後はない。

男は面白そうにナタリーに近づくと、両腕を壁についた。

「あなた何者？。血が美味しいって、あなたがあの事件の犯人な」
「あの事件…？…ああ、あの下等な奴らが起こして怪事件つてや
つか。あんな奴らと俺を一緒にしてもらつちゃ困る」

犯人を知つてゐるような男の口ぶりに、ナタリーは何か聞き出せない
か試みる。

「あなたは犯人を知つてゐる。それは誰？」

「さあて。知つてゐるような知らないような」

明らかに犯人を知つてゐるくせにもつたいぶつてニヤニヤしてゐる男に
腹がたつ。

「それより血をくれ。腹が減つてゐる」

男の瞳が妖しく光り、ナタリーは男にいきなり抱き締められた。

「ちよつ…！？」

突然のこと驚いていると、首筋にブツリ…と音をたてて痛みが走つた。

「つ…！？」

首筋に顔を埋めてる男の喉元が「ゴクリ…ゴクリ…と音をたてているのが分かる。心臓の鼓動にあわせて送りこまれる血が男に奪われていく。

なにこれ…私の血を飲んでるの…いやあ…！

恐怖で顔が真っ青になる。

やつぱり血が抜き取られるという怪事件の犯人はこの男？ならば今男がしてる行為を阻止しなければ自分は死ぬ…。

…やだ…死にたくない。

死にたくない…なのに血が奪われていくせいか体に力が入らない。

恐怖に一筋涙をこぼすと、男は何かを警戒するように顔をあげた。解放された安心感に力が抜けてその場にヘタリと座り込む。

「フンッ…、下等な奴がお前の血の匂いに誘われてきたみたいだ」男は、二人以外誰もいない教会の中を見渡して、ナタリーには見えない何かを感じとっているようだ。「来たぞ」

男が目線を天井に向けた。ナタリーも視線を上にあげていく。するとそこに黒い何かが張り付いていた。

「ひつ…」

教会の天井に張り付いている黒いもの…頭と胴は人の形をしているが、手足が六本あって、まるでクモのように広げている。突如現れた「ソレ」の頭がギギギ…と音をたてて回り、明らかにナタリーを見つめている。

気味が悪い

「ソレ」と目が合つて、ナタリーは恐怖に震えた。

「その…女…の…生き血を…すすりたい…！」

男と女の声が同時に混ざりあつたような声で、

「ソレ」が叫んでくる。

「あれがお前が言つていた怪事件の犯人だ。最近はアイツらの数が極端に増えてな。それよりお前狙われてるぞ？生き血をすすりたいつてさ。熱烈にラブコールされてるが、どうするんだ？」

男がクツクツとおかしそうに笑つている。

笑つている場合じやないだろ？と怒りたいが、少々貧血ぎみでそんな気力がない。

「…あなたは私を助けてくれないわけ…？」

力が抜けて一人で動けない今、頼みの綱となるのは目の前の男しかいない。

「なんで俺が」

上機嫌に笑つっていた男があからさまに嫌そうな顔をする。

「私の血、あげたでしょ！！」

「俺に恩を売る気か。いい度胸だな。だが…………まあいいだろ。お前の血は特別に血かつた。この先も俺にその血を捧げるなら、助けてやってもいい」

勝手に人の血を吸つといて、その上この先も捧げると？冗談じやない！…が、ドオオーンツと大きな音をたてて

「ソレ」が降りてきた。ズルズルと這いつくばつて迫つてくる。

「血が…………ほしい…………ほしいい…………その女の血…………よこせえええ…………」

「ソレ」が大声をあげて突進してきた。

「あ～あ、お前もアイツに体中の血、全部吸われておさらばだな」あんたも吸つただろう！と言いたいが、突進してくる

「ソレ」とこの男じや危険度の違いなどはつきりしていた。

ここで血を全部吸われて死ぬか、この先ずっとこの男に血を捧げて生き延びるか、不本意だがナタリーの心の中は決まつていた。

「わかった！あんたに血、あげるから早くアレを何とかしてつ…！」

すぐそこまで

「ソレ」が迫つてきてもうダメだと目を瞑つた瞬間、ドガツと鈍い音がしてガシャアアーン！とステンドグラスが粉々に割れた。

「きやあああ！…」

凄まじい音にナタリーは絶叫した。そつと目を開けると教壇側にあつた大きなステンドグラスは粉ごなに砕け、ぽつかりと大きな穴が開いていた。

男はというと、さつきと全く同じ場所につつたつて一步も動いた形跡がない。

「あ、終わつたぞ。アレはもう死んだ」

「嘘…」

一体なにをしたのだろう。男はその場から動いた形跡がなく、ただ凄まじい音がして気がついたらアレがいなくなつていた。

「嘘だと思うなら外に見に行けばいいだろ。グチャグチャになつての見たいんだつたらな。それと、さつきの約束は守れよ？いいな」

「わ…わかつてゐる…………といつか…あなた本当に何者…？」

「本当に分からぬのか。田舎じや情報が遅れてるのか知らないが、俺はバンパイアだ」

「バンパイア……が何でここに…」

「そんなお前に話す氣ない。それよりここを離れたほうがいいんじゃないのか？お前からまだ血の匂いがふんふんしてアイツらまた寄つてくるぞ」

だから出血したのはあんたのせいでしょ！

と言いたいが、まだふらふらして怒鳴る元氣がない。

「ねえ…私を家まで運んでくれる？」

「だからなんで俺が」

「貧血だからよ…立てないんだつてば。家に帰つて栄養とらないと私あなたに血をあげられないんだけど。よく分かんないけど私の血、おいしいんでしょ？」

そう言うとバンパイアの男は渋々ナタリーを抱き上げると

「家まで案内しそう」と書いて運んでくれたのだった。

こうして謎のバンパイアと出会い、約束を交してしまったナタリーがこの後波瀾万丈、奇々怪々な生活が待つてるとは夢にも思わなかつた。なかつた。

数奇的な出会い（一）（後書き）

「んにちは。読んで下さった方ありがとうございますm(——)m
今回は謎の男の名前を出さないで終わってしまいました(へへゞ
しばらく出さないかも。結局分かったのはナタリーとカトレアだ
けでしたね。でもこれからどんどん登場人物を出していって絡ませ
ていきたいなあと思つてますのどどぞよろしくお願いします。

数奇的な出会い（2）（前書き）

第1話 数奇な出会いのすぐ後のお話になります。

数奇的な出会い（2）

「ねえ… なんで家にあんたがいるの」

ナタリーは不機嫌な表情でベッドに横になる男を睨みつけた。

「お前が約束したからだろう。俺に一生血を捧げるってな。早く俺のために血を生産しろ。」こちちはせつき雑魚一匹殺すのに力を使って腹が減る一方なんだ」

悪びれもせずナタリーの家にあがりこみ、足を組んで寝転がつている。

「血をあげる約束はしたけど家にあがつていいなんて言つてないってば。私は貧血で足がおぼつかないから、家まで運んでって言つただけ！」

「… それが俺に対するセリフか？ この場でお前の血、全部飲んでやつてもいいんだぞ人間」

体を起こすと、ナタリーに近づいて強迫する。

ナタリーは一瞬ひるむも、負けじと対抗した。

「別にそれでもいいけどあなたが私の美味しい血一度と飲めなくなるだけだものね！」

確かにこの女の血の味は甘美で極上の味がした。こんなに美味しい血は滅多にないだろう。

一度味わったら忘れられない。そんな味だった。

それをひと飲みしてしまうのも勿体ない。

男は黙つて再びベッドに横になると、腕を枕にして眠つてしまつた。

「ちょっと、だから出ていってって言つてるじゃない…！」

叫んでも注意しても返事はなし。

なんのこのバンパイアは…自ら中すぎるッ！

ナタリーは扉を乱暴に閉めるとリビングの椅子に座つた。

外見は人間でも、あの男は人ではない。それに命を助けてもらつためとはい、血を提供し続ける約束をしてしまつたことを後悔する。

誰かに相談しようか。すぐ思い浮かんだのはカトレアだつた。

「ううんダメダメ！カトレアにこんな話できるわけない！それにあ

んな危険なヤツがカトレアに会つたら何をするか分からんし…」

神様…どうか何もおこりませんように。お父さん、お母さん、どう

かナタリーを見守つててください。壁にかけてある十字架に向かつて堅くお祈りする。とにかくあのバンパイアには出でていってもらわないと。家には置いておけない。

意を決してもう一度バンパイアの眠る部屋の扉を開けた。

だが、そこには眠つているはずのあの男がどこにもいない。

「あ…あれ？ いない…」

出ていつてくれたのだろうか。

とりあえずいなくなつてくれてホッと安堵する。

「良かつた」

パタンと扉を閉めるとノックの音がする。

誰かきたのだろうか。もしかしたらカトレアかもしれない。

「はーい」と声をあげて玄関へと向かつ。パタパタと階段をおりて扉を開けた。

「ナタリー、こんばんは！」

そこにはナタリーの予想どおりカトレアが立つていて。「ねえナタリー、夕飯一緒にたべましょ？」

二コ二コと上機嫌なカトレアに、ふつと笑みがこぼれる。

「うん。中にはいつて。カトレア」

「お邪魔します」

「カトレア、なんかご機嫌だね。何かいいことあつた？」

「うん。実はね、さつきすつごくかっこいい人見たのよ

「へえー」

カトレアは目をキラキラ輝かせている。

ナタリーはまたカトレアの悪い病氣が始まつたと呆れるかえる。カトレアは少しでも異性に優しくされたり、容姿の綺麗な異性をみつけるとすぐに惚れこんでしまうのだ。

「今日はね、私が会つた男の人の中でも特別にかつこ良かつたのよ」。

「ふーん」

「ナタリーは興味ないのー? つまらなそりに聞かれると私悲しくなるんだけど」

とは言つても夕飯の支度をしている途中で話しかけられては、集中できない。

「で? どんな人だつたの?」

仕方なく話を聞いてあげる。

「それがね、黒髪で赤い瞳をした背の高い男の人だつたのよ。珍しいわよね。旅の人かしらあ」

黒髪に赤い瞳…。

思わず手がとまる。

「……そ…そう。良かつたね」まさかあのバンパイア…いなくなつたと思つたら村中ほつつき回つてるんじや…。
「ううん。気にしない気にしない。いなくなつてくれた方が有難いし。

カトレアも何もされてないみたいで良かつた。「あれ? ナタリー、首どうかしたの?」

バンパイアに血を吸われた傷を指摘されてギクッとする。

一応布をあててあるから直接傷が見えることはないのだが。

「あ…ちょっとね。今日不運にも棚から物を取りだそうとした時に物が落ちてきちゃつてぶつけたの。痛かつたあ」
とつさに嘘をつく。

「うわあ…痛いじゃない。気をつけなさいよナタリー」「んー。

気をつける

嘘ついて「めんね、カトレア…

心の中で、自分を心配してくれる親友に向かつて謝つた。

その日の夕飯はカトレアが来てくれたおかげで、ナタリーは楽しい

一時を過ごした。

唯一無二の親友、カトレア。彼女はナタリーが両親を亡くしてからは特に、ちょくちょく遊びにきてくれる。ナタリーが一人で寂しくないよう、「」、気づかつてくれてるに違いない。

「ありがとねカトレア」

「やあねー、急にお礼なんか言っちゃって。変なのー」

あはは、としばらく会話をした後、カトレアは自宅へと帰つていった。

長い長い一日がやつと終わる。ナタリーは家の扉に施錠すると床についた。今日はいろんなことがあった。教会に行つたら変な黒ずくめの男と出会い、人ならぬモノに襲われた。

思い出すだけで身震いがする。あの黒い化け物、一体どこから現れたのだろう…。怪事件がおきたという話は耳にしていたが、それは人事で、どこかで自分には関係のない話だと思つていた。でも、見てしまった。あの化け物を。

飢えたように血を激しく求めておそいくる化け物を。

もうあの教会にはいけない…。また今日みたいなことが起こつたら嫌だし、大好きだったステンドグラスも壊れてしまつたから。目をかたく閉じ、布団を頭までかぶつた。

お父さん、お母さん…一人は怖いよ…。辛いよ。どうして死んじゃつたの…。

感傷に浸つていると、窓からコンコン…と音がした。気のせいかと思つて、音はいつにいつに鳴りやまなくて。

コンコン…コンコン…

そんなはずはないとナタリーは耳をふさいだ。きっと幻聴だ。だってこの家は一階建て。ナタリーがいる部屋はまさに一階で、こんな高い位置にある窓をノックできるはずがなかった。こんなことできるのは化け物くらいだ…。

まさか…教会に現れた化け物がまた…？

昼間の恐怖と今起こっている事実が重なる。
いやあ…、こないで…

ブルブルと肩が震える。

怖い…

怖い…
…！

「おい人間、ここ開けろ」

「…？」この高慢なしゃべり方は…

あのバンパイア…？

途端に心から恐怖が消えていく。

「いるんだろう。開けろ」

高慢な態度は気にくわないが、彼がいると何故か心に余裕ができる。
教会での化け物をいとも簡単に倒すほど強いからなのかだろうか。

よく考えたら、彼も化け物も吸血行動というやつてることには大差
ないのに、彼には怖いという感情はあまり生まれてこない。

「早く開けないとここ割るぞ。いいのか」

窓ガラスを割られたら地味に修理費がかかつてしまつ。彼の脅しに慌ててカーテンを開けた。

カーテンを開けた時、満月をバックに彼が窓枠にしがみついて侵入しようとしている体勢で、まさにバンパイア、という感じだつた。シユタツと軽やかに床に降りたつ。

一体どこに行つていたのかは知らないが、何も一階から入ることはないとと思つ。しかしさか戻つてくる、とは思つてなかつたから意外だつた。

「あー眠い」

「……なんでバンパイアが夜眠くなるのよ…」

「うるさい、人間。黙れ」

「ナタリーだつてば。ちゃんと名前あるんだから、呼ぶなら固有名詞で呼んでよ」

昼間もフルネームで名乗つたではないか。

「いーや、お前なんか人間で充分だ」

「じゃああなたの名前教えてよ…」

「断る」

やつぱり…。人には名前を聞いたくせにその名で呼ぶわけでもなく、自分は名乗ろうとしない。勝手すぎる態度にほとほと呆れて寝ることにした。

ナタリーは彼が入つてきた窓に鍵をかけて、カーテンを閉めた。
「私寝るから。バンパイアさんは隣の部屋とか開いてるからそつち使えば…？」

一言だけそう伝えると、布団の中に再びもぐつて目を閉じた。さつきまで恐怖で眠気などなかつたが、今はゆつたりとした睡魔の波が襲つてきて、気持ちよく眠れそうだ。

「ナタリー・ライアード…か」

ナタリーが完全に眠つた横で、バンパイアの男は静かにそう呟いた。

◆はHコクソソ（繪畫也）

前回のすぐ続きになります。

柔らかい日射しがさしこんでくる穏やかな朝。布団にもそもそもとく
るまつて夢心地にひたつていると、下から何やら騒がしい音がする。
せつかくもう一眠りしようと、うとうとしていた所なのに非常に耳
障りである。すると物音はどんどん大きくなってきて、部屋の扉が
壊れるんじゃないかと思うくらいの勢いで開いた。

「おいつ……ナタリー、お前飯食え！ いつまで寝てんだ」

綺麗な顔をした黒髪の青年が入ってきた。

そう、彼はナタリーの使用人。

「早く飯食つて血液増やせ。俺の食事がかかるてるんだぞ！」

……ではなく、最近居候しはじめたバンパイアである。名前はまだ知
らない。

ナタリーは布団にぐるまつたままゆっくり身を起こした。

「ちょっと……いきなり女性の部屋に入つてくるなんて失礼じゃな
い。着替えるからあっち行ってよ」

布団をすっぽりかぶつて身を隠す。

男はそんなナタリーの言つことなど聞かずにジカツカと部屋に入つ
てくると、布団をナタリーから取り上げた。

「！？ やだあつ」

寝間着姿が露になるのを防ぐように丸くなる。

「誰がお前なんかの寝間着姿見てムラムラするか

「……。馬鹿つ！ 変態！」

ナタリーは手元にあつた枕で男を一、二度殴ると、かけてあつた力
一ディガムをはおると勢いよく部屋を出た。

失礼なヤツ！ いきなり部屋を開けるわ、そのまま中に入つてくるわ、
布団ははぎとるわ、デリカシーの無いバンパイア！

ナタリーはリビングの椅子に腰かけると、目の前の料理を口に運ん
だ。

「なんなのもう…イライラするつ……つて…………え…？」
無意識のうちに口に運んでいたが、これは一体誰が作ったのだろう。

一人暮らししながら食事はいつも自分で作っていたが、今日は起きたばかりで作るどひりかキッキンすら立っていない。

「…………」

「あ?なんだ。まだ食つてないのか」

髪を搔きあげながらバンパイアの男が一階から降りてきた。

「…」の料理…誰がつくれたの…」

男は皮製の椅子にドカッと座ると自分を指差して

「俺」と一言。

「…………へ?」

何を言つているのだろう?とぽかんとする。

「なにボケッとしてるんだ…。早く食え」

「え…、あ…はい」

バンパイアが料理したの…?妙な感じだが、さつき

「飯食つて血液を増やせ」と言つていたから、おそらくそれのためだろう。

「だけど、わざわざ自分で作つて食べさせるんだ…。

変なの。最初から変なバンパイアだけど。夜は眠つて言つし、朝早く起きて朝食は作つてくれてるし…。

チラッと男を盗み見ると田が合つた。というより頬杖をつきながらずつとナタリーが食事をしているのを見ているのだ。

「な…何?見られてると食べづらいんだけど…」

「早く血が欲しいと思って」

ガクツとする。結局この男は血のことしか考えてないんだ。

別に違う答えを期待していたわけではないのだが。

「…」のスープおいしい…何入れたの?」

会話無しでは気まずいので料理の感想を言つてみる。

「それは魔…」

魔…といいかけて男は口ごもつた。

魔…………？魔つて何…？なんか嫌な予感がするんですけど。何か怪しいもの入れてるんじゃ…？ピタッと口に運んでいた手を休める。

「食えるもの以外は入れてない。だから早く食え」自分の失言に動きをとめたナタリーに食事を再開するよつ急き立てる。

ナタリーは怪しい…と思いつつも、見た目も味も一見普通に見えるので、残さずに食べた。

「ねえ…」

リビングの真ん中で抱き合つ二人。

「あんだけよ…」

ナタリーの首筋から少し唇をはなして彼女を見る。

「…私の血つて美味しいの？」

なんだそんなことかと男はまた首筋に顔を埋めるとブツツ…とナタリーの肌を貫いた。

「…………」

ズキズキと鈍い痛みが首に広がつて苦しそうな声が漏れる。

これからずつとこんな生活が続くのだろうか…。

ナタリーは天井を見上げた。

部屋中にバンパイアが血をすする音だけが響く。

「ゴクリ」

「ゴクリ」

と喉を鳴らして飲みほす音。視線を落としてみると、男が切なげな

表情で首筋に顔を埋めてる。

ナタリーはその顔にどこか色っぽさを感じてドキリとしてしまった。
綺麗な顔…。透き通るような肌に黒髪が映える。

男はやつとナタリーの首筋から顔を離すと、唇についた血液をペロリと舐めとった。

ナタリーは、吸血行為が終わったのを確認するとすぐに止血の処置をした。また血を奪われたせいか頭がはつきりしない感じがする。少々よろめきながらトサツと皮製の椅子に腰かけると目を閉じた。意識がぼんやりとして、このまま眠れそうな倦怠感がある。

「お前の血、旨かった」

男がぼそりと呟いた。

ナタリーは少し目を見開いて

「良かつたね…」と力なく答えた。

「眠いのか？」

血を飲んで満足したのか優しく問いかけてくる。

「うん…」

「クククとゆつくり頭を上下させて頷く。

このまま寝ちゃおう。再び目を閉じて寝息をたてようとした時、口

ンコーンと扉を叩く音がした。

ナタリーは重たい瞼を開けると体を起こして来客の応対しようとした。ところが体を起こそうとした時に、男に制止されてまた椅子に座らされてしまった。

代わりに出てくれるのだろうか。有難いが彼の姿を見られるのは厄介だった。まず見られたら彼とナタリーの関係が問われるだろう。名前も知らない相手なのに。わかっているのは彼は人間じゃないこと。それだけだ。しかし、倦怠感で体を動かすのが億劫だ。もつどうでもいいや、と思つていると扉がガチャと開いて、女の叫び声が聞こえてきた。

「きや――――あなたは黒髪の王子様！？なんでここに…？」

甲高い女の声。

カトレアだ

黒髪の王子つて…。バンパイアのこと?ダメよカトリア、そんなやつに恋しちゃ。その男人間じやないんだから。

アンタ、誰

無愛想な声

「初めてで、私がトリアです。ナタリーの友達の！黒髪の王子はなんですか？」

どこか可愛こぶりっこな態度で男にアプローチをかけてる。カナノア、お願ひだからそいのだけはやめなさい!!

言いたいが力が抜けたようにぼーっとして動けない。

お、俺は死んだ。

「ナタニエル、何がアーヴィングの本か？」

「！そ、それ」

は！？

何言つてんのこの男は！たた単は思ひ付かなかつただけだし。

虚よカトリア。信じなハで。

「い… いつから？」

「昨日から。もう同棲中」

違うのがトレー……たたの居候よ。しかも人間じやないんだから

同様、一いつの間に、そんなんが、和風髪の三三のこと、犯つてたのにー。でも、親友の恋人だつたんじや仕方ないわね。友達

「いるのはいはるが、ナタリーはちょうど寝るところだ」として応援してあけなきや、あのナタリーします？」

「寝るって今お腹ですか〜? もしかして具合悪い? こんじゅ〜ナタリ

11

バンパイアの男を押し退けて部屋に駆け込む。入つてすぐにはナタリ

ーの姿が見えて、おでこに手を当てた。

「ナタリー大丈夫！？眞合悪いの？」

「…………ううん。眠い」

ナタリーが欠伸をしたのを見てホッと胸を撫でおろす。

「なあんだ。眠いだけなのね？良かつた。ナタリーは一人暮らしで無理しちゃうところあるから気をつけるのよ？でも、恋人と住むようになつたから前よりは安心ね」

実際は逆なんだけど…、カトレアが気遣つてくれてるのは嬉しいの

「うん」と頷いた。

「ナタリー、椅子で寝たら疲れちゃうわ。寝室で寝ましょ？…………てあら……寝ちゃつた」

スヤスヤと安らかな寝息をたてはじめたナタリーを見て、カトレア曰く黒髪の王子に向き直ると、

「ナタリーを一階に運んで下さい」

と言つた。

バンパイアの男は面倒くさそうにしながらも、恋人と答えてしまつたので仕方なくナタリーを抱き上げて寝室へと運んだ。

「ナタリー羨ましいわあ…。黒髪の王子様にお姫様だつこされてるう」

ナタリーを軽々と抱き上げて運ぶ男の後ろ姿を見やりながらカトレアが羨んだ。

「あの、ナタリーを幸せにしてあげて下さいね！じゃあまた」

男の後ろ姿に一言もつひとつ、カトレアはライアード家を出でいった。

それをみて男は安心したような疲れたような溜め息をつくと、ナタリーをベッドに寝かせた。

思えば自分が人間の世話をしているなどおかしな話である。

「俺、何しにきたんだっけな…」

頭をポリポリ搔いてると背後から声がした。

「何しにって忘れないでくれよエリクソン」

振り返るとそこには、男と同じ赤目を持つた銀髪の青年が立っていた。

「ツバイ？ なんでお前がここに？」

「その台詞そつくりそのまま返すよ。君が人間の家になんでいるの。エリクソン、君は元々あの下等生物を排除するために来たんでしょう。こんなところ用はないはずだよ？」

「ああ……そういえばそうだったな」

「全く……全然アレの数が減つてないからおかしいと思つたよ。君程のバンパイアならあんなヤツら一掃できるでしょ。こんなところで油売つてないで僕と行こう？」

本来の目的を忘れてもらつちゃ困るとツバイは呆れ顔で外へ出ようとするが、バンパイアの男、エリクソンは動く気配がない。

「どうしたのエリクソン？ 行くよ」

「…………いや、ここで寝てる女の血を一生もらつと盟約を交したんだ。だからな……」

「ふーん……？」かなり血の匂いに反応してツバイが眠つてゐるナタリーに近づいていく。

「……確かに美味しそうだね。味見したくなるよ」

ツバイの瞳が妖しく光り、ナタリーの白い首筋を捕える。

そのまま吸い込まれるように顔を近づけて牙で貫こうとした瞬間……

ゴスツ

鈍い音がしてツバイの後頭部に痛みが広がつてていく。

「…………つた……何？ なんで殴るの……？」

エリクソンが拳を高々とあげて一回目の攻撃体制に入つている。

「それは俺の獲物だ。手え出すな」

威圧的に上から見下ろしてくるエリクソンが妙に陰つていて怖い。

「『めんつ…！悪かつたよエリクソン！つい味見したくなつて。』エリクソンが独占したくなるほどこの女の血は美味しいのだろうか。ツバイはますますナタリーの血に興味を持った。

「…ん…、バンパイアが目の前にこんな美味しそうな見つけたら確かに動きたくはなくなるよね。でもさ、たまには仕事してよ？アイツら弱いくせに数は半端ないから僕たちの餌になる人間がどんどん消えていつちゃうかも知れないしね」

「分かつて。しかし面倒だ。出来損ないバンパイアのアレの処分を俺たちがしなくちゃならないなんてな」

「出来損ないのバンパイア…？？？」

突然の女の声。

エリクソン、ツバイは一斉にナタリーを見た。

「あらら…お嬢さんはお目覚めみたいだね。どこから話聞いてたのかな？」

見しらぬ人物の登場に布団で半分顔を隠す。

「…誰…？」

「僕はツバイ。エリクソンと同じバンパイア」

「エリクソン…？エリクソンて…？」

チラッと男のほうを見る。

「あ？俺の名前だ。悪いか」

フイツとナタリーから視線をそらす。

別に悪いとか悪くないとかないんだけど…。

「あのねー、エリクソンは照れ屋だから名前はなかなか教えてくれないんだよ。初対面の時教えてくれなかつでしょ」

そういうえばそうかも。人間嫌いだから教えてくなかったのかとも思つたが、照れ屋…と言わればそうなのかもしれないとナタリーは思つた。

「あと君の名前は…」

「ナタリーです」

ベッドから身を起こすとツバイに簡単に自己紹介した。

「ナタリーね、よろしく。あ、さっきの話だけ出来損ないのバンパイアは世間を騒がしてるやつらのことだよ。俺たちはね、そいつらを排除するためにきたわけ。だってアイツら俺たちの大変な食糧をどんどん殺しちゃうからね。ま、でも君は大丈夫みたいだよ？ エリクソンが君のそばにいたいみたいだし、ござとなつたら守つてくれるよ」

「え？」

エリクソンが私のそばにいたい？

「おい、誤解を招くような言い方するな。俺がこの女に惚れたみたいだらう。ただの餌だ餌」

餌…。そうね、私はただ血をあげるために生かされたようなものだも。『はいはい分かつてよエリクソン。じゃ、僕はそろそろいくね。エリクソンも本当に仕事してよ…じゃあね』ツバイは寝室の窓から身を乗り出すとそのまま飛び降りてしまった。

「きやあ！？」

「…アイツも人間じゃないんだ。飛び降りたところで別に死にやしない」

エリクソンが落ち着いた声で説明する。

それにしても心臓に悪いとナタリーは思った。

エリクソンはツバイもいなくななり、ナタリーの部屋を出でて扉に向かつて歩き出した。あわててナタリーが声をかける。

「待つて！ あのね…」

エリクソンが立ち止まる。

「エリクソン…。エリクつて呼んでいい…？」

それはなんでもない、ささやかなお願い。

ただ、名前を教えてくれなかつた彼には言いつらへられて、ナタリーはおずおずと尋ねた。

「…………好きにしろ」

エリクソンはナタリーを振り向きもせずにそろいはなつと、部屋

を後
にし
た。

バンパイアの力

バンパイア…

それは人の生き血をすすり生きる魔物である

見た目は眉田秀麗…人と変わらぬ姿をし、血を奪う機会を密かにうかがっているのだ…

「ナタリー… おい…ナタリー」

頬をペチペチと叩かれて目を覚ます。

「なに… うるさいなあ…」

「呑気に寝てる場合かお前は。アレがこの村に近づいてる。数は二匹だ」

「え…？」

アレとは世間を騒がす人ならぬ怪物のことである。バンパイアのようく生き血を求め、一度喰らい付くと血液を一滴残らず全て吸いとつてしまふ恐ろしい存在である。

エリクによると、出来損ないのバンパイアというものがらしい。

「またアレが…？ 最近多くない？ エリク、なんとかしてよ」

「分かってるが…。つてお前に指図される覚えはない」

エリクは不機嫌になるとなかなか言つことを聞いてくれない。

「どうか自分が一番という考え方で、人間を皆見下してみてい。バンパイアの彼にとつては自分はただの食糧なのだ。特にナタリーの血は美味らしく、怪物に襲われた時に助けてやる代わりに血を捧げろと言つてきた。ナタリーもその時は死にたくない思いが強くてついOKをだしてしまつたのだが、今になつて後悔している。エリクはほとんど毎日ナタリーの血を求めてくるからた。たまにならまだしも、ほぼ毎日吸われてはいつも貧血ぎみになつてしまい大変なのだ。

その内本当にパツタリ死にそうで怖い。

「お願いエリク、村を守つて？私にとつてはこの村が全てなの。お父さんもお母さんもいなくなつて……ひとりになつた私を助けてくれたのは村のみんなだから」

両手をあわせて、一生懸命お願いする。

正直怪物に対抗するような武力はこの村にはない。

王都や栄えた町ならまだしも、田舎の小さな村にはそんなものは全くない。みな温厚な性格で武力とは無縁なので、怪物対策もしてないから太刀打ちできるのは目の前のエリクただ一人だけだ。幸い彼は力の強いバンパイアらしく、話せばなんとか聞いてくれるし、もともと怪物討伐隊のようなものらしいので大抵は勝手に退治してくれる。

だから世間ではかなり騒がれている怪物も、この村にはまだ侵入してはいないのだ。

だが、その代わり怪物を倒して帰つてくるなりエリクは疲れたと言つてナタリーの血を求めてくるのだ。

そんなに頻繁に吸わないと死んでしまうのだろうか？と質問したところ、無視された。エリクは自分に都合の悪い質問だとすぐ無視するので、どうやらそうではないらしい。

ただ単に美味しいから吸いたいだけなのだろう。

「エリク……お願いします。村を救つて下さい」

「…………」

「お願い！」

「わかつた。行つてくる」

エリクソンは面倒くせやうに立ち上ると、怪物がくるであろう方向を見つめて窓から出ていった。

ナタリーとしては窓枠が汚れるので玄関から出ていつて欲しいのだが、それを言つたらさらに不機嫌になつてしまいそうなので我慢した。

エリクソンは人並みならぬ速さで村を走りぬけていくと、遠くに黒い物体を発見した。近づくと一匹の怪物が旅人らしき人間をくわえて生き血をすすつてるようだ。

血
血が欲しい

「うまい」・「足りない」・「足りない」

「四の怪物は男女の声が入り混じたよくな氣味の悪い声を發しながら生き血をすすつてゐる。

「ハア…。なんでこんなやつらの相手をしなきゃならないんだ俺は」

溜め息をつくと、怪物の三四がエリksenに氣合いで振り返る。

「お? ひざなん? 誰がやるかよ?

怪物はギギギ…と軋むような音をたてながら姿勢を低くして、攻撃体勢に入つた。

〔……血……うめそくな匂いだ〕

怪物は舌舐めずりするとエリクソンを見て咳いた。

「そんだけ血い吸つといてまだ足りないのか。貪欲だなお前ら。…

怪物がエリクソンめがけて飛びかかる。高々と飛び上がつたそれにエリクソンは余裕の笑みをこぼすと、手の平にポウと光の玉をつくりだし、怪物の開いた口めがけて放つた。

光の玉は怪物の口内に見事命中すると、怪物の体内に入り、みるみる怪物の腹が膨れていき、しまいには粉ごこに弾けとんだ。

その時やっと生き血をすすり終わったもう一匹の怪物は、仲間が殺されたのを確認すると一田散に逃げ出した。

「…逃がすか」

エリクソンはニヤリと笑うと走り去つていく怪物に狙いを定めて灼熱の焰を放つた。

放たれた焰は勢いを増して怪物との距離をぐんぐん縮めていくと、怪物を丸のみにして焼き付くしてしまった。

怪物の断末魔の叫びが一瞬聞こえたかと思うと、そこにはもう、ただの焦げ跡しか残つていなかつた。怪物の肉体が焼かれた後の灰すらも残さない、絶対的な魔力。それをもつのがエリクソンなのだ。

「いやーエリクソン。見事だね。僕が出る幕なかつたよ」

背後から拍手をしてツバイが現れた。

「お前がいたなら俺は別に鬪わなくて済んだのにな。無駄な力使つたみたいだ」

「何言つてゐるエリクソン。僕はついつき駆け付けたばかりで、その頃には君がすでに一匹ふつとばしてゐたこだつたよ。相変わらず凄い技だよね」

肩に手を置いて、まるで上司が部下によくやつたと言わんばかりの態度だ。

「それよりアイツらどこから湧いてくるんだ。魔界か？」

「多分ね。あとアイツらに血を吸われた人間がなるみたいだよ。感染してくみたいな。だからそこに転がつてゐる旅人の死体も、その内アイツらみたいになるだろうね」

ツバイが血を吸われつくした旅人の死体を見つめている。というより観察しているに近い。

「じゃあこの死体も処分するか」

エリクソンが死体に手を伸ばそうとした瞬間、倒れていた死体がガタガタと動きはじめてムクツと起き上がった。

「気をつけてエリクソン！くるよ！」

「分かつてる」

二人はいつ攻撃されても瞬時に対応できるよう身構えた。動きだした旅人の死体は噛まれた部分から皮膚がみるみる黒くなつていき、全体に広がつていった。

「へえ…こうやって仲間増やすんだね。知らなかつたよ」

「…感心してる場合か。いくぞ」

まだ体が完全に変化しあえる前に倒す。

エリクソンは焰を作りだすと、敵に狙いを定めた。ツバイも続けて人さし指を死体に向けると落雷を落とした。

エリクソンが透かさず焰を放ち、焼き付くす。

二人の攻撃を同時に受けて、ガタガタ動いていた死体は塵となつて跡形もなく消え去つた。

「はあ…全く疲れちゃうよね。ナタリーに血もらいにいこうかな。エネルギー補給しないと」

ツバイが村がある方向に体を向けると、エリクソンがツバイに向かつて小石を投げつけた。

小石はツバイの頭に見事ヒットし、ツバイはその場にしゃがみこんで頭をおさえた。

「痛ーツー！！冗談だよエリクソン。分かつてるよ。ナタリーの血は吸わないよ。…………つていうか本当ケチだなあ。少しくらいいいじゃんか。それともナタリーが好きなの？…………つて痛い痛いツー」

頭めがけて次々とんでもくる小石をガードするも、エリクソンのほうが上手で何個かまた頭に当たつてしまつた。

「馬鹿なこと言つてるなツバイ。ただの食糧だと言つてはいる。それ以上言うと頭かち割るぞ」

エリクソンの表情が険しくなつて本氣でヤバイと思ったツバイは冗談を言うのをやめた。

「「めん」「めん。あ！あっちでまた奴らが現れたような気配が～！

僕行かなくちゃー。じゃあねエリクソン」

ツバイはエリクソンから逃げるよつこかかへれと去つていつた。

「気配なんかするか。嘘つきめ」

エリクソンはツバイが去つた方向をみながらナタリーのいる村へと
引き返した。

何してきたの？

「ハア…倒したぜ」

エリクは一階の窓を開けるとそこからピヨンと部屋の中に上がり込んできた。

「ちよつ…窓から入つてこないでよ」

眉間に皺を寄せ、腰に手を当ててナタリーが出迎える。

「あ？別にいーだろが。細かいこと気にしてつと顔中皺だらけになつぞ。」

エリクは自分の眉間に指でさすと、何食わぬ顔で言つた。この透かした態度がナタリーの癪にさわる。

「なつ！？あなたなんかただの居候のくせに」

「あ、？なんか言つたかよ」

「何も？」

ナタリーの文句に不機嫌になるエリクソン。だが、ナタリーはそんなエリクソンを無視してキッチンへと向かった。

ナタリーとエリクソン、この二人は人間とバンパイアという関係である。本来なら出会うはずもなかつた二人なのだが、世間を騒がす怪事件が起こつたことにより一人は出会つてしまつた。怪事件と

いうのも、生き血を奪われた人間の死体が数多く発見されるというものであった。それは世界規模らしく、今だ得体のしれない犯人に、人々は恐れおののく日々を送っているのである。

だが、ナタリーは知っている。その得体のしれない犯人を。

それはバンパイア。生き物の、得に人間の生き血を好み、突如現れては人々の生き血を喰らつてしているのである。悍ましい、恐ろしい存在。ナタリーは一度襲われたことがあった。村はずれの小さな教会。そのステンドグラスが好きで、度々足を運んでいたのだが、その時に奴は現れたのだ。黒く、何本もの手足を持ち、男と女の声で血を求めてやつてくる。

もうだめ！ そう思った時、たまたま出会ったエリクソンに己の血を与える代わり助けてやると言われ、生きたいがためにそのような約束をしてしまったのだった。

それからと言つもの、エリクソンはナタリーの家に居候をし、血をもらつてはたまに出現するバンパイアからナタリーを護つているのである。

だが
。

高慢で口悪いエリクソンに、ナタリーは扱いに困っていた。言つことは聞かない。すぐに血を求める。性格は最悪だった。

（あ～なんであんな人を居候させてるのかしら。）

ナタリーは苛々しながら夕飯の支度をしていた。

(あんな約束するんじゃなかつた…)

エリクソンに一生血を捧げる。その約束を解除したい。ナタリーの頭の中はそれだけでいっぱいだつた。だが、彼ら人外の者ゆえ、逃がれようと思つても容易ではないだろつと思つた。

(そもそもエリク、自分の身の上話した時ないじゃない一バンパイアつてことしか分かつてないわよ…)

そう考えるとナタリーは苛々して仕方が無かつた。じ、その苛々が口に出ていたのだろう、エリクソンがキッチンに顔を出しついた。

「あ、？俺の文句なんかたれてんじゃねーザ！」

「わッ！なんでいんのよ。あなたはどつか行つててよ。ビーセ何も教えてくれないくせに！」

「お前が俺のことを知つたとこでなんの利益があんだよ。必要ねーだろ」

「やうかもしれないけど…。でも、ちょっとくらい教えてくれたつていいじゃない…」

気丈な態度だつたナタリーが突然ショーンと肩を落とすと、エリクソンは調子が狂つてしまつ。

(おいおい…なんだよ急にショーンとしゃがつて)

人間とバンパイアとはいえ、同じ屋根の下で住むようになつから

にはお互いのことを知りあっても良いのではないかと思つたのだ。

「なんだよ。何が知りてーんだ」

面倒くさそうに、けれども仕方ないところにHリクソンが折れる。

「…いいの？」

「……って言つてんだる。早くしろよ人間」

（人間ね…。まーたそりやつて見下した言い方するのね）

Hリクソンに言いたい文句は山ほどあつたが、折角教えてくれるチャンスを見逃すわけにもいかないので、ここはなんとか我慢した。

「Hリクは…どうしてこの世界にきたの？」

「それはだな…。アイツらを減らすためだ。ほら、下級バンパイア。お前だつて襲われただろ？が。ていうか言わなかつたか？この話し

「…ううん。聞いてないけど。いつ話したの？話してくれたつけ？あ…やっぱり聞いたような…でも忘れた！」

（あ……あれか。ツバイが来た時ちつと話したけど。寝てたんだつたなコイツ。そんで寝ぼけてたかなんかで覚えてないんだな）

Hリクソンはいつかの晩を思い出した。

「Hリクはあれを下級下級つて言つたが、あなたはどうなの？」

「はー? お前俺をアイツらと一緒にしてるわけじゃないよな? そしたら殺すぞ。……つかバンパイアにだつてな、階級みたいのがあって、その中でも俺は上級だ。一緒にすんな」

ヒリクは拗ねたようにハイツとハーモを向いてしまった。

(ふーん。そんなのあるんだ。人間と変わらないわね)

「上級と下級の違いつて理性があるかないかのかしら? よく分からぬいけれど、あなたは人型だけど下級バンパイアは違うわね」

「よく分かつてるじゃねーか。あれは出来損ないだから氣品も理性もねえ」

「へえ(ヒリクソンに氣品…ね…)

まさかヒリクソンから氣品などとこいつ言葉が聞けるとは思つていなかつたので氣づかないうちに口元が笑つていた。

「お前…なに笑つてんだよ」

ヒリクソンの眉間に皺が寄り、額には青筋もたつてゐる。正に殺人鬼のような顔になつて彼にナタリーは慌ててごめんと謝つた。

が、彼の怒りは謝つただけでは治まらず、ヒリクソンはナタリーの肩を乱暴に掴むと壁に押し付けた。

「……っ…」

掴まれた肩が痛い。身長差もあり、そもそも男女の力の差がある。ナタリーは抵抗も出来ずに壁に背中を押し付けられて、ただエリクソンに対する恐怖と不安にうちふるえていた。

恐怖するナタリーの首筋にエリクソンの顔がうめれる。

この体勢は……。

バンパイアの吸血行為時の体勢だ……。

ナタリーはギュッと目をつぶり、次にくる肌を貫かれる痛みに耐える覚悟した。
が……

エリクソンはふっと首筋から顔を離した。

「え……？」

「え? ってなんだよ。つか何その呆けた顔は」

目を大きく開いてパチクリしてナタリーを間抜け面と馬鹿にするエリクソン。けれど、ナタリーはどうして彼が急にやめたのかが気になつて仕方ない。

「だ、だつて血吸われると思つたから…」

「ああ、そんなに吸われたい？吸つたら吸つたで嫌がるくせに……。

今のはな、ただの脅しだ」

はははと可笑しそうに笑うエリクソン。対してナタリーはホッと安堵し、胸を撫で下ろしている。

（今のは本当に怖かつたんですけど…）

まだ治まらぬ動悸に、ナタリーは自身を落ち着かせようと深呼吸を繰り返した。

そんなナタリーを見下ろし、エリクソンはそんなに利き目があったのかと自負する。

それにしても人間の、特に女というものは口のわりには弱いものだと思う。口はいつもまえに次々と言葉を放つのに、少し脅すと縮こまり何も出来無くなつて格段に弱くなる。

だから人間はバンパイアにとつてはただの餌なのだ。弱く脆いその体は、いくら抵抗してもバンパイアには敵わず、下級の…あんな出来損ないのバンパイアにまで簡単に喰われてしまつんだ。

（でもま、コイツの血は他にはない血があるからな。それだけは認めてやるよ）

エリクソンはナタリーを卑下た瞳で見た。冷たい、ただの餌とか見ていない氷のような瞳。人間とバンパイアがわかりあうことのない大きな壁。

「……もうわかつたろ？俺の話しさは終わり」

そう言ってエリクソンはキッキンを出て行った。

(……あんまり教えてもらつてないんですけど……)

少しさは互いを理解し合おうかとも思つたが、あっちがあんな態度
じゃわかりあえるはずもない。

(なんで私エリクのこと知りうつと思つたんだろ。馬鹿みたい)

ナタリーはスクツと立ち上がると調理途中だつた料理を再開した。

ドタバタなバンパイアたち

「やあー！－ナタリー！僕だよーツバイだよー遊びにきたよおー」

バンツー！とドアがはじける音がして、勢いよくツバイが現れた。あたしの家にはいろんな人が集まります。

そしてちょうどテーブルを磨いていたナタリーに思い切り抱き着く。

不意をつかれたナタリーは受け止めきれもなく、一人まとめてドタン！と大きな音をたてて床に崩れ落ちた。

「いだあつーーー？」

倒れた勢いで床に背中を打ち付け
と、

思いきや。

背中に痛みはなく、床に打ち付けたという衝撃もなく、おや？と思つていると、ツバイが片腕で倒れかけの自分を支えてくれていることに気づいた。そのためナタリーの身体は床から10センチくらい離れた距離に浮いた状態で止まっている。

「ふーー。間に合つた。ごめんね？驚かせて。頭とかうつてないよ
ね？」

う。

綺麗でかわいいお顔が至近距離。

しかも心配そうにウルウルした赤い瞳で私を見て…。
かわいすぎです！

と、ぽーっと見つめていたら目の前のツバイ君が一瞬ニヤリと笑

つた気がして。

視界からツバイ君の顔が消えたかと思うと、次の瞬間、首筋にざらりとした感触がした。

「うひやあ！……つむぐぐ！…？」

ぞくりとして悲鳴をあげた瞬間、てのひらで口をふさがれた。

「しつつ、今はエリクソンいないんでしょ？だからせ、ちょっとだけでいいんだあ。君の血、味見させてくれない？」

え！？

血い！？

目の前のツバイ君はにこりと爽やかに微笑んで見せた。赤い瞳が細められて、これまたかわいい……。

けど！！

待つて！

この人いま何て言ったの！？

ツバイ君の顔にみとれて呆けた頭が一気に目を覚ます。

血！？血つて言つたよね！？

そうでした！この人、綺麗でかわいい顔してる人だけど！

でも！

れつきとしたバンパイアでツ！エリクの仲間で！

ていうか、どうしてあたしは一度しか会つた時ない人に抱き着かれた上に、首筋をし、舌（舌だよね？）、で舐められたあげく、ぽーっとみとれちゃつてるのよ！しかも押し倒されてる！

信じらんない！

やつと我にかえつたナタリーは口をふさいでいるツバイの手をはずそうともがいた。

が、びくともしない。

な、なんでえ！？

わたわたと全身でもがいてみるが、全くもつてツバイには通用していないようだった。

「んんんん～～！！！（はなして～～！！）」

瞳だけツバイに向け、なんとか抵抗を試みようともがくが、ツバイはここにこと笑つてゐるだけ。

「、コイツ…。

「そんなに暴れないでよ。大丈夫。痛くしないし、注射でちくつとされる程度だしね。血も味見ていどだから安心してよ。」

味見い！？

嘘だ。絶対嘘だあ！そんなこと言つて、バンパイアつてのは要求した血液量以上に血を飲んでくくせにー（エリクで嫌つてくらい分かってるんだからーあたしが何回貧血おこしてると思つてゐるのよー）

涙目でやめてと訴えるがツバイは聞く耳なし。赤い瞳が怪しく光り、本気モードになつてゐる。

うう…

父様、母様、あたし、この頃変なに付き纏われてばかりです。あたし、何か悪いことしましたか…？

死を覚悟したかのよつて、ぶつぶつと祈りを捧げはじめたナタリー。

（死を覚悟するほどのことかなあ～…。まあ、こつか。ちよつとだけ
味見 味見 ）

ツバイはぶつぶつ言つはじめたナタリーをよそに、白い歯をその
白い首筋に突き立てよつとした。

…が。

「…テメ…なにやつてんだ」

ドスの聞いた低い声。

さあ～…つとツバイから血の氣がひいていく。

背後からは、見なくても分かる、暗く冷たい…妖氣（？）が…。

聞き慣れた声に祈つていたナタリーは目を開けた。

んん？ エリク？

帰つてきたんだ。帰つてこなくともいいけど…。嬉しくないし

…。

「…俺の食糧になにやつてんだよ。減るだろ」

…ほら。人のこと食糧あつかい。…いいけど。最初からそうだし。

ツバイは慌ててナタリーの上から飛び降りる。そして必死に弁解はじめた。

「なに言つてんのエリクソン～。僕、別にナタリーちゃんの血い吸おうだなんて思つてないよ??勘違いだよ。勘違い。ほらっ…、その…、なんていうか?エリクソンがいない間、ナタリーちゃん一人で淋しいかと思つてえ～。遊びにきただけ。ほら、さつきのは～…遊び遊び～!」遊び～!

見え透いた嘘を…。ツバイ君、嘘つくる下手だね。それにせつきのがごつこ遊びつて…。無理があるじやん。

あたし、少しさは怖かつたのよ?血、吸われるんだと思つて。

「…そりかよ」

は?なに?

納得したの?今。

エリク～…え、本当に?

「ふう～…助かつたあ」

ツバイが胸を撫で下ろしている。

…んん…?いいんだ?血、吸われてなければ許すつて」と?

ふーん…。そう…

あたしは基本的に食糧でしかないのね。

動物界でいう、ハイエナ(ツバイ)に獲物あたしをとられなければいいつて考えなのね。あなたは、なんか…、あたし(人間)ってバンパイアに馬鹿にされっぱなしなのね。情けなくなつてくる。というか悲しい。

「あ、エリク、そういうえばどうして行つたの？朝早くからいなかつたけど」

「あ、？俺がどこに行つと勝手だら？テメエにや関係ねーよ

む。

エラソーニ。

「なにその言い方…。あたしがエリクを居候させてあげてのにやうこう言い方つてないと思うんだけど」

立ち上がり、腰に手を添えて言つてみると、いかんせんエリクの方がはるかに身長が高いので全く迫力にかけてしまう。

見上げたエリクの顔は、苛立ちに顔が歪み、長身なのと、怒るといかつくなるとこう最悪の要素が拍車をかけて、端正な顔立ちは今や鬼の形相である。

「人間のちびのくせに。なんか言つたかよ？」

ああん？と睨みつけてくるエリクはまさに取り立て屋のじとし。でも本職はバンパイアなんだつて。黙つてればいい男なのに。なーんて本人には言わないけれど…。

あたしは負けたくないくて、片足を一歩まえに踏み出すと、ふんつ！と胸をつきだして言つた。

「言つたわ。あなたを居候させたのは」のあたしですー。」

シーンと唇をとがらせて睨みを効かせると、エリクの高慢+取り立て屋のごとし眼光が降り注いできて、二人の間に火花が散った。

「お前…」の前あんだけ脅したのに、俺に口答えとは…学習能力のね～女だな」

「何よ！あの時は確かに怖かったわよ…血、吸われると思つてびびつたわよ！でもここで怯えてあなたに負けるのは嫌なのよ…確かに人間はあなたたちバンパイアから見たら、ウジムシ…ううん…ミジンコ以下くらいなんでしょう！？でもね、あたしにだつてプライドがあんの。バンパイアにただペコペコ頭さげて、血、吸われて生きてく人生なんて堪つたもんじゃないわ」

はあ、言つた。

言いたいこと言つてやつたわ。

あたしはね、家畜みたいにエリクに飼われるような」とはまっぴら「めんなんだから。

言いたいを言つた私はふいとそつまを向くと、エリクもツバイも何も言わなくなつた。

なにこの沈黙。

早く言い返してきなさいよエリク。

沈黙されるなんて思つてなかつたんだけど。

なんか…場の空氣もいやーな感じだし…あたし、退散してもいいの？悪いの？

ああ…、今の勢いで自室に籠ればよかつた。どうして立ち止まつてしまつたの？あたし。ちょっと後悔。かつかしていた頭が、だんだん冷えてくる。

思ったこと言つたあたしだけど…、バンパイア一人相手にこの発

言、まづかつたかしら……。

これであたし二人にブチ切れられたら本当に殺されるんじゃ……？

今度はそんな不安が頭をよぎる。

ちらつと二人を盗みみようとした時、視界が真っ暗になつた。背中が何かにしめつけられている感覚もある。

この感じは……。

抱き着かれてる……？

「あああー！かわいそうに。ナタリーちゃんはバンパイアがそんなに嫌になるくらいエリクソンにいじめられてるんだねー！きっと盟約だ、なんだとか言われて吸血を無理強いされてるんでしょう？だから嫌なんでしょう？でもエリクソンは嫌いになつても僕は嫌いにならないで？バンパイアでも、僕はナタリーちゃんみたいな子、好きだから。ね？」

「えー？あ、……はい……、ありがとうござります……。」

まだ会つてから一回田のツバイ君に好きとか言われてもピンとこないし、言つてることが本当かどうかも疑わしいけど、エリクンは好感のもちやすいバンパイアよね。

性格かわいいし。

どうしてエリクと先に会つてしまつたのかしら。神様の悪戯。

「ね、僕だったら君を貧血で倒れさせたりしないよ？だから……ね？ちよつとだけ血を……ぐはあつーー？」

突つ立つてたエリクがボソッとつぶやいたツバイに蹴りをいれた。

はあ……前言撤回。

あたしはこんなバンパイアに囲まれて、一体どうなつてしまつの

でしょうか。

結ばれた盟約

あたし、ナタリー。

ナタリー・ライアード。ここ、ガルバの国のはずれの小さな村に一人で暮らしています。

両親は一年前に不慮の事故で亡くなり、兄弟のいなかつた私は嫌でも一人に。

初めは両親の死が受け入れられず、泣いてばかりの毎日。そんな私を励まし、いつもそばにいてくれたのは親友のカトリアです。カトリアはだいの仲良しで、一人ぼっちの私のところへよく遊びにきてくれる良い子です。

でも面食いなのがたまに傷…。

カトリアに限らず、村の人たちは皆私に親切にしてくれる人ばかり。

そんな優しく、楽しい村の人たちに助けられながら、私はここで生きています。

そんな細々と、でも幸せな生活をしていた私に最悪な事態がふりかかつたのです。

私、実は、今は一人暮らしじゃありません。

あることがきっかけで、人間じゃない人と同棲することになつちやいました。

しかも男です。

結婚したとかそんなんじゃありません。

そんな幸せなものでは決してありません。

だつてその人

バンパイアですか

ナタリーは羊皮紙に筆をはしらせ、日記を書いていた。

「なので…いつか魔物にとりつかれた私を助けてくれる人があらわれますよ・う・に…つと。でき……」「おいつ、ナタ！、腹減った。血…！」

「…。」

「おいでなすつた。」

この口の非常に悪い、長身の男が、バンパイアです。

髪は黒。服も黒。性格はドス黒い。絶対。だつて高慢で自分勝手で、人間を馬鹿にしてて。

全身真っ黒おばけのバンパイア。

唯一黒くないのは瞳。血みたいに真っ赤な瞳で、お腹がすくとわたしをギラギラした瞳で見てくるんの。飢えた獣みたい。

ちょ…、こ、怖いんだけど…。」

エリクは、（あ、名前はエリクソンって言つの）つかつか歩み寄つてくると、椅子に座っていたあたしの肩を強引に掴んで引っ張つた。

ガタンと音をたてて木製の椅子が倒れる。

エリクは、無理矢理立たされてふらつくあたしを強引に抱き寄せると、首筋に顔を埋めてきた。

ハア…とエリクの生暖かい吐息が首にかかる。

ぞくつ…

背筋がビリッとする。

…悪寒です。

感じてるんじゃありません。

「……っ…

不意にザラッとした感覚があたしを襲う。
いや〜〜ッ…！

舐めた！この人舐めやがった〜…！

「ちゅっ…〜？早く終わらせてくれ」

あたしの顔、間違いなく真っ赤だと思う。

怒つてると、いやらしい、恥ずかしい行為をされたのと、ダブルで。

「だつたら大人しくしてろ。動くんじゃねえ」

真っ赤な瞳が見つめてくる。あたしはそれだけで動けなくなつた。だつて真っ赤な瞳がいつもにも増して妖艶な輝きを放つていたから。どんな宝石よりも、ルビーなんかよりも綺麗な瞳だつたから。

あたしは固まる。

そしてエリクは再び顔を埋めると、あたしの首にブツリ…と白い歯を突き立てた。

「…あつ…」

ブツッ…とあたしの皮膚を破つて異物が突き立てられ、あたしはビクリと体を震わせた。

防衛本能で、体がエリクから逃げようと動いた。
けど、エリクがそれをさせてくれない。

背中と腰にまわされた彼の腕ががつちりとあたしの体を押さえて離さないから。耳元では、ゴクリ…ゴクリ…と喉を鳴らす音。
そう。

エリクは今、あたしの血液を美味しく飲んでるの。
なんでつて？

そういう約束をしてしまったから。
化け物に襲われたあたしのを助ける代わりに、あたしの血を一生エリクに捧げるつて約束をしてしまったから。
バンパイアから見て、あたしの血液は極上、とつても美味しいらしい。

味なんて人間のあたしには分からぬけど。
たまたま美味しかったから、こうじて吸血されてるわけです。
あたしとエリクはそういう関係。
それ以上でもそれ以下でもない。
血を分け与える者と、それを糧に生きる補食者。
これが一生。
あたしが死ぬまで続けられる。
皆さん、軽い口約束には気をつけて。
後々後悔するかもせりませんよ？

あ…。

少しほーつとしてきた。血、なくなってきたみたい。
あたしはエリクの胸を軽く叩く。

「ね……、そろそろ終わり。あたし死んじゃう」

そう言つとエリクの上へ下へしていた喉がピタリと止まる。

すつ……と皮膚を破つていた牙が引き抜かれ、エリクは頭をあげた。赤い瞳は、さつきよりもより濃く、赤黒いものになつていた。少し視線を落とすと、エリクの口の端から、たつた今まで啜つていた血液がたらりとこぼれていた。

これが生き血を啜るバンパイアの本性。

……なんてグロテスクなの……

背筋がぞくつとする。だけど、その光景についつい魅入つてしまふ。怖い。恐怖すら感じるのに。一枚の絵画のように美しいと思つてしまつのはなぜ……？

エリクは口の端からこぼれた血液を舐めあげると、最後に袖で口元を拭つた。

そして、首筋をおわく、ぼーっと立つてゐるあたしを見た。

「おまえ……」

何……？

まだ血が足りないとか言つて……いや……

「……俺に惚れた？」

「ぶつ……！？」

「な、ななな、何言つて……！？」

「じゃあ動搖すんなよ」

エリクはさもおかしそうに笑つてゐる。

「…からかわれた。バンパイアに。あたしは血の量が減つたせいか、反発する氣力もなく、ベッドのわきまで四四歩つていいく。

「？寝んのかよ」

「うん。夜も遅いし」

ぱふっとふかふかのベッドに横になる。布団もかけずに畳を開じた。

じつして畳を開じると神経が耳に集中する。遠くからホーホーとふくふくの声。

虫の鳴く声もする。

賑やかだわ。

夜つて案外静かじゃないのかも知れない。

だつて夜、行動する動物たちもいるのだから。当然といえば当然。あ…

あたしは思いだしたように畳をり開いた。そして首だけ横に向ける。視界に入つてくるのは、全身黒づくめのエリク。

彼は壁に背をついて立つっていた。レディーの部屋にまだいる氣…

…？

あたしは、寝るから部屋を出て欲しいと言おうとした。

でもやめた。

なんだか様子が変だつたから。エリクがある何かを睨みつけている。

あたしはそつと視線をたどつた。

そこには月が差し込む部屋の窓。夜空には無数の星がまたたいている。

何を睨みつける必要があるのかしり。あたしは訳もわからず、ただぼけ一つとそこを見つめた。

ザツ…

「…！」

カーテンがあきっぱなしの窓を、黒い何かが横切った気がした。
な、何？今の。きのせいよね……
鳥の影かもしれないし……
気にしないようにしよう。

そう思つたけど、エリクが何かを警戒するよつて窓の外をずっと
見てる。それがあたしに言つようのない不安を起しこせゐる。

「…エリク…、こま何か通つた……？」

あたしは堪らずエリクに尋ねた。

エリクはちらりと私に視線を合わせ、すぐに戻すと言つた。

「……ああ。なんか通つたな。気配がする」

エリクはツカツカと窓に近づいていく。

そして窓から1メートルくらいの所までくると立ち止った。

「おい。てめえ。それで姿隠してつもりか？壁に張り付いてんの
バレバレなんだよつ」

エリクは窓に向かつて一喝した。

あたしは起き上がり、布団をたぐつさせて震えた。

…また？

またあの黒いお化けがあたしの家に…？？？

エリクがいるとはいえ、またあの化け物に会うのかと思つと、冷や汗がふきでてくる。

嫌だ。

みたくもないのに。

と……。

ついにそれが姿を現した。
黒い物体が窓枠のはじから頭をのぞかせる。
そこには目玉らしき赤い光が一つ。

「ひつ……！」

あたしは布団を思つてさりかぶり叫んだ。

「やだやだやだやだ……エリク、早くやつはつはつ……！」

あたしはきやーきやー泣き叫ぶ。早くになくなつて……
化け物なんて嫌い！あたしを殺さうとやつてくるから。

早くになくなつて！

「…………おや……？私は何故にお嬢さんと怖がられてこらのドショウ。」

ねえ？黒坊ちゃん」

「てめえ… その呼び方いい加減やめろ…！」

あたしが恐怖につちひしがれないとエリクじゃない男性の声がした。

「黒坊ちゃん、私にはこつまでもあなたは坊ちゃんですよ。今更呼び方変えられると思います？」

「だーかーらつー坊ちゃんはやめひつんだークソジジーー！」

しかもエリクと会話してゐる…？

これはどういうこと……？

恐る恐る布団を持ち上げ、窓の方を見た。そこには化け物じゃなく、エリクよりは年上の大人な男性が窓から部屋をのぞきこんでいた。

……ていうかここ2階ですよ……！…？

「おやー可愛らしげお嬢さんだ。すみませんが、中にいれて貰えます？」

少し垂れ目な赤い瞳が緩やかな弧を描く。

白髪で、長い髪を一つに結わえている男の人だつた。

化け物じゃない…（？）あたしは予想していたものと全く異なつていた展開だけに、ぽかんとした。

どちら様ですか…？

あたしが何か言つ前に、その男の人は勝手に窓を開けて中に入ってきた。

黒のタキシードを着たその男の人は、スラリと長い足をきちっと揃えると、被っていたシルクハットをはずし、丁寧にお辞儀をした。

「お嬢さん、こんな夜更けに大変申し訳ありません。うちの関係者がお世話になつてゐるようで、」挨拶をしに参りました」

「は…はあ……」

あまりにも丁寧口調、そぶりをする男性に、あたしはただ見とれた。

なんて紳士な人なんだろう？関係者つてエリクのことよね……？

この人も瞳が赤いし、きっとバンパイアなんだわ。

「柄にもない」としゃがつて…じじいめ

さつきからエリクは眉間にシワを寄せて、ぶつくさ言つてゐる。じじい…つて…、この人充分若いわよ？まだ30代くらいいじやない。だ。だからいつまでも黒坊ちゃんなんですね

「エリクソン。あなたはそんなに私が嫌いなんですか？仕方ない子だ。だからいつまでも黒坊ちゃんなんですね」

男の人は、腰に手を当てて、エリクソンを叱責する。けど、垂れ目なせいかあんまり怒つてゐるよつには見えない。たいして怒つてないんだと思う。

「だから…俺は坊ちゃんじゃねーーーー！ガキじやねーんだ」

エリクは不満そうに、大声で怒鳴つた。耳がキーンとする。

「エリクソン。お静かに。それに恩師に向かつてその態度はなんで

すか」

恩師……？

エリクの？

「……エリクも教育機関にお世話になつてたことがあるんだあ。普段、不良みたいだから、意外だわ。……つて、そうじやなくて……。」

「あのう……あなたはどういう様ですか……？エリクの先生ってこうのは一体……？」

恐る恐る聞いてみる。

すると男の人はにっこり笑つて自己紹介をはじめた。

「申し遅れました。私、ハブロ・カマルと申します。エリクソンには、魔法と退魔方法を教えていまして。あつ、退魔と言いましても、魔物と戦う力を身につける方法という意味でして、決して聖職者がやつてるものとは意味が異なりますので」注意を」

「は……はあ……。あのう……ハブロさん……？今日はどうつたじ用件で？」

「今日は、エリクソンに用がありまして。なに、少し重要な話がありましてね。少しエリクソンをお借りしてもよろしいですか？」

ハブロさんは、バンパイアどうし重要な話があるのだと言つ。あたしは一人を邪魔する理由もないし、どうぞ、と頷いた。ついでに一階のリビングで話しこそした方がいいだろうと思い、彼に提案した。

ハブロさんはそれは有り難いと、あたしに一礼すると、エリクに

田で合図して部屋を出ていった。エリクは渋い顔をしてハブロさん
のあとをついていく。

嫌そうな顔……。これからお説教される子供みたい。

あたしは一人がいなくなつた部屋の扉を静かに閉めて、ベッドに
潜り込んだ。

やつと寝れるっ……。

さあ眠ろう、と田を開じた。

でも……

寝れない。

お客様がいるのに、この家の主人が寝てしまつてどうするのだ。
例えバンパイアと言つても客は客。それにハブロさんはいい人そ
うだつたからお茶くらいだそつかな。

ナタリーはぴょんとベッドから跳ね起き、一階のリビングに向か
つた。

「これは良いソファですね。ゆったりしていて非常に良い」

リビングに置かれたラブソファに腰かけながら、機嫌良くハブロが言った。向かいがわに座つたエリクは、そんなことどうでもいいと言つた様子で、早く用件を言えと催促している。

片足はすでに籠<じゆすり>をはじめ、苛立しげだ。

「あなたはせつかち＆血<じみ>口<くち>中<なか>、高慢<たかまん>…昔<むかし>からそうでしたが、今もですか」

ハブロはそんなエリクを残念に思つてか、頭<じゆい>を垂れて呆れた。

「つるせ<じゆせ>よ。早く用件<じゆいん>言え」

「……はいはい。仕方<じほう>ない子<こ>だ」

「だからガキ扱い<じゆい>すんな！」

「わかりましたから。ではエリクソン、本題です。あなたは人間界で下級バンパイアをだいぶ倒してまわつてくれているようですが……なぜこのような場所に居座つているのです。早く人間界にはい出た下級バンパイアを倒して、魔界に戻つてくる約束でしよう？あなたならすぐ出来ると思って、バンパイアの中でも有能なアルカイブ一族のあなたに頼みましたのに。シルビアも淋しがつてますよ？お可哀相に。婚約者のあなたが、人間界の、しかも女性宅でお世話になつていると知つたら……彼女、泣きますよ……？」

「泣かねーだろ、あの女は。そもそも俺らは表面上での付き合いだけだし。あいつもそう思つてるだろ」

「しかしねえ……」

ヒリクソンは興味なさそうに欠伸をした。

「……ともかく、あなたをここにおいてくれてる人間の彼女にも迷惑がかかるります。こちらにいる間は私が面倒みますから、今日でこの家を出ましょう。いいですね？」

階段を軋ませ降りる。内容は分からぬけど、二人とも何か話をしてるみたい。

「ここであたしが行くのはお邪魔かしら……？」

一人の会話に参加するわけじゃないしつか。

ギシと音をたてる階段を一段一段おりて、リビングまできた。すると、ハブロさんがの声が聞こえてきた。

「……ともかくあなたをここにおいてくれてる人間の彼女にも迷惑がかかります。こちらにいる間は私が面倒みますから、今日でこの家を出ましょう。いいですね？」

……え……？

今、なんて……？

あたしの体が急停止する。

今日でこの家をでる？……エリクが？

嘘……。

咄嗟に戸棚のかげに身を隠した。

ショックだつた。

信じられない。

……本当に？

ショックで動けず、立ちすくんると、エリクがあたしの気配を察知してこっちを見た。ハブロさんもそれにつられてあたしを見る。ハブロさんは申し訳なさそうに、重たい腰をあげて歩み寄ってきた。

「お嬢さん、…ええと…？」

「……あつ、ナタリーです」

ハブロさんの声にハッとして名前を名乗った。

「ナタリー。エリクソンがあなたと同じまでの関係になつたのかは分かりません。しかし、エリクソンは事情がありまして、今日でここを出ることになりましたから。もし男女としての関係があつたのならば、あなたにとってはエリクソンとの別れは悲しいものだと思います。ですが、どうか理解下さい。急な訪問と急な別れを許して下さいね…」

ハブロさんはそう言つとあたしの両手をそつと握りしめた。

ひんやりした手の平だった。

エリクは何にも言わない。

あたしは俯いたままで、二人からはその表情は全く見えない。あたしはドキドキしていた。

だつてエリクが…。

こんな急にいなくなるのよ？

高慢で血几中なバンパイアが、あたしに血を一生捧げると約束さ

せたバンパイアが……？

「これはもう……。

ああ……ダメ……

なんとか我慢して表情を隠そうとしていたけど、あたし、もう耐えられそうにないわ

「肩が震えています……。悲しいのですね。すみません。エリクソンが急に転がりこんだばかりに」

ハブロさんが何か言つてゐる。
でもそんなの聞こえない。

だって……だって……もう……

「いやつたあ~~~~~！！！！！ あたし、エリクから解放されるのね~~~！！！ ハブロさんつ、ありがとう！！ ありがとう！！ どうぞ、エリクを連れてつて下さい！！ ハア～ 良かつたあ~~~。やつとあたしに平和が戻つてくるのね~~~！ 神様、ありがとう~~！」

人生最大の笑顔で、あたしは泣きながら喜んだ。ハブロさんに握られていた手を握りかえして、ブンブンと上下に振った。ハブロさんは大人しかつたあたし豹変ぶりに驚いて、目が点になつてゐる。

「やつたやつた！じやつ、元氣でねエリク！ 短い間だつたけど、まあ、ちょいととは楽しかつたわよ？ ミジン」「くらいだけど」

あたしはハブロさんの手を掴み、ぴょんぴょん跳ねながらエリクに別れの挨拶。

エリクは、物凄い形相で額に青すじをたててゐる。

「てめえ～~~~~~、調子こきやがつて。約束、忘れたとは言わせねえぞ~~~~~？」

「約束？なんのことかしら。知らないわ」

あたしは歡喜に冷静さを忘れて、エリクに向かつて子供っぽくあつかんべーをした。

「約束とは？一人とも、何か契約でも交わしたのですか？」

あたし達の言つてることが分からず、ハブロさんは尋ねてくるけ

ど、Hリクがいなくなる今は、あの約束も無じだものね。

「いいえ。何も？で、Hリクを連れていくて下せー。あー玄関はあつちなんで」

「ほんの、クソ女ッ！…ふざけんな…！下級バンパイアから守つてやるかわり、血を一生ぶん俺に捧げる約束はどうしたあ…！」

「なにそれ。妄想？」

その言葉にHリクがさらに怒った。
ハブロさんがいるから今のあたしは無敵だもんね
あたしは本当に調子にのつていた。

「二人とも…お・静・か・こ…！」

ハブロさんの声が高らかに響き、あたしとHリクは一斉に口をつぐみ、ハブロさんに注目した。
ゴホンとハブロさんが咳ばらいにする。

「一人とも…少々落ち着きなさい。今のお話、本当なんですか？」

「本当だ！」

あたしが何か言つ前に、Hリクが即答した。

「お嬢さん、Hリクソンはいつ頃つてこますが、本当ですか？」

「う…………、…………はー」

あたしは正直に答えた。ハブロさんの赤い瞳が…正直に言わないと殺す、と誓つてゐみたいだから…。

「…ハーリー、わかつかは知りません。ハリクソンに聞きます。それは口約束? それとも正式な術式によるものですか?」

口約束と正式な術式のもの……?

何かひつかかったあたしは、即座に答えた。

「口約束でした」

「…ふむ。ハリク?」

「その女の…」

ハリクも正直に答える。そしてپیچとモロを向いてしまった。

「ハブロさん、あたし、そういう約束をしきやつたからハリクを家においていたんです。…でも…正直辛くて。取り消したいんですけどハリクに盟約だ、約束を破つたら殺すつて脅されて…」

あたしはこの際だからハリクと出合つたきつかけと、今までの経緯を全て話すこととした。

全て話しあると、ハブロさんはハリクをちらりと盗み見て、あたしに言った。

「…やつでしたか……。なにゆえハリクソンがここに滞在しているのかがよく分かりました。けれどナタリー。その約束はきちんと盟約ではありませんから、守らなくとも良いのですよ?」

「……ひー……じじい」

エリクソンが言つたとハブロさんは睨みつけた。でもハブロさんはそれを無視して続けた。

「“じいじい”ですか……？」

「正式な盟約は術式を使って相手を縛り付けるのです。しかし、あなたのお話によると、本当にただの口約束。つまりエリクソンがあなたを脅していただけとなります。全く……何をやつているんですか。エリクソンは」

ハブロさんは盛大に溜息をつく。

え……？

ただの口約束？

最初から盟約は成立してなかつたあ……！？
じゃ……じゃああたし、今まで騙されて脅されてただけ……？

信じられない……

貧血になつただけじゃない。

「お嬢さん、ともかく契約……いえ、盟約を交わしていないのならば、エリクソンは私が連れていきますから。」「安心下せ」

ハブロさんがにっこり微笑む。

そうだ。盟約なんてなかつたんだから、本当にエリクンはお別れなんだわ。

ホツ

「……！今、ホツとしゃがつたなてめえ」

ところどきから怒ってるエリクソンは何かしら。人を騙して
いて。怒りたいのはあたしなんだけど……（？）

「なにまだ怒ってるんですか、エリクソン、行きますよ？ではナタ
リー。お元氣で。下級のバンパイアはまだ全滅したわけではないの
で、お氣をつけ」

「う……。

そうでした。

あいつら……いなくなつたわけじゃないんだわ。

口約束とはいえ、今までエリクソンがいたからあたし、今ここに
いるんだろうけど……。

ハブロさんがそんなこと言つから、急に不安になるじゃない。
これからエリクに吸血されなくなるのは安心。でも、貧血になら
ない保証はできても、今度は命の保証がゼロつてわけで……。

「はい。生き延びられるよう頑張ります……」

でも、大丈夫よきっと。今まで一人でやつてきたんだし…
それにツバイ君やエリクソンが、下級バンパイアをやつづけてく
れるんでしょう？
だったら安心よ。
心配ないわ！

「エリクソン？何をぼうつと立つてるんです？行きますよ？それと
も名残惜しいんですか？彼女の血が。確かに、お嬢さんからは私達
を惑わす芳しい香りがしてきますからね」

ハブロさんがあたしにその綺麗な顔を近づけて、くくんくんと匂い

をかいだ。

「ちゅつ……ハブロさん、顔がちかい……つ」

途端に真っ赤になるあたしの顔。

きつと熟れたトマトみたいな顔になつてること間違いなしだわ。

と、そこへ、さつきまでだんまりだったエリクが割つて入つてきた。

「俺のに近づくな。」

は？

なんて言った?この人。

「俺の食料だ!」

……あ、そう。

食料ね。

ビックリしたわ。

何をうらじくない」と言つてゐるのかと思つたわ。

食料でホツとしたわ。

……。全然良くないけどー？

「ちよっとエリクーあたしは…「今きめた！…」

……？何を？？

「正式に術式で盟約を結ぶ。わりいが…てめえの血液は極上だ。俺がみすみす手放すと思うか…？クククク…」

不敵な笑みを浮かべるエリク。

ちょ…！ククク…って。そんな陰つた顔で笑わないでよ。怖いわよ。

ていうかちよっと待つて…？

今…術式で正式に盟約を結ぶって言つた！？

何言つてんのよ？あたし、解放されたんだからね。そんなの無理なんだから。

あたしは慌ててハブロさんの後ろに隠れようとしたが遅し。首ねっこを掴まれてまんまと捕獲されてしまった。

「首だせ。」

きやー！

脱がすな馬鹿ー！肩が出る！肌がでるー…お嫁にいけなくなる

「エリクソン、本気ですか！？あなたにはシルビアがいますのに

シルビア？

誰それ？

それより、このド変態バンパイアからあたしを助けて下さー！

「シルビアなんか知つたことか。それより俺はいい食料が見つかってこっちのが大事なんだよ」

「しかし！ 術式で盟約を結ぶとは、所有の印をつけるといふことなんですよ！？ それはつまり…あ～もう…！ シルビアが怒ります！ いいからそれだけはおやめなさい…」

「それはつまりなんですか！？ その先が気になります…！ それに所有ってどうしたこと！？」

あたしはエリクの家畜になれつてことですか！？

ハブロさんは切羽つまつた様子でエリクソンを叱りつけるが、エリクソンはあたしと“盟約”（契約…？）を交わそと必死にあたしを掴んではなさない。

「やだやだやだ…！ 絶対やだ…！ なんでエリクの“もの”にならなきやならないのよ～～～！」

「いいから言つこと聞け…！ そもそもハナっから俺の食料になる約束だらうが… 謹めり…！」

「いやだーーーーーあたしはエリクの家畜にはなりたくないーーーー！」

手を振り、足を振り、必死の抵抗をみせても、エリクソンにはかなわす。ハブロさんも引きはがすとエリクソンに掴みかかるが、それもエリクソンに振りほどかれ…。まあ…二人相手に、器用だこと。

と、思った隙に、エリクは何やら呪文のようなものを呟くと、同

時に掌に現れた小さな紋様を、あたしの首筋に押し付けた。

「……つう……」

途端に首筋に激痛が走る。あたしは苦痛に顔を歪めた。ドクドクと脈うつのに合させて、ズキンと刺すような痛みが襲ってくる。

ようやく痛みが引いてきた頃、首筋を見ると小さな痣ができていた。それは小さな魔法陣のよつた形をしていて……。

なにこれ……

あたしはエリクとハブロさん、一人を交互に見た。これはなんですか?と聞くように。

「手遅れです……」

『愁傷様』と、ハブロさん。

「今度こそ本当に盟約は成立した。」

と黒い笑みを浮かべるエリク。

え……

これが、もしかして……?

「お嬢さん……、リクソンの言ったこと、聞こえました? 盟約、成立です」

成立……。

あたしの中のなにかがガラガラと音をたてて崩れ落ちていく。

盟約……成立……。

あたし……エリクの家畜、決定……？？

い……

い……

いやあ――――――――――

お前に期待する

神様なんていない。

うん。

絶対。

だつて本当にいるんだつたら、バンパイアにとりつかれたあたしを見捨てるわけがないでしょう？

リビングにへなへなとへたりこむ。

盟約だか契約だか知らないけど、あたしはとうとう本当にバンパイアに捕われてしまつたみたいだ。

その証拠が首筋にあるコレ……。

赤い痣つぽいマーク。小さな魔法陣みたいな模様の。

これはバンパイアがコイツを所有してますっていう所有印らしい。たつた今エリクにつけられた。

エリクの所有物。

……。食料として。

ショックキングすぎて立ち上がる力も出ない。

一度は約束だから、とエリクに一生血を捧げることを決めたけど……、ハブロさんが現れてそんな悲しい人生から解放されるのだと希

望の光が見えた瞬間、これだ……。

あたしを希望の光からあえなく撃沈させた元凶は、満足そうに薄暗い笑みを浮かべて笑っている。

「……こいつ……。

人が絶望してるってのになんて奴。

あたしがへたりこみながらエリクを睨みつけていると、ハプロさんが口を割つた。

「お嬢さん……、その印は一生消えません。印をつけた本人でも、一度と消すことのできない代物なのです」

一度と消えない……

なんですと……！？

「ああ……何と言つて」とだ……。よりもよつて、女性であるあなたにその印をつけるとは……シルビアが怒ります……」

だから、シルビアって誰ですか……？
さつきから疑問に思つていたけど……。

「だからシルビアはべつになんともおもわねーよ。たかだか人間の女に印をつけたくらいで」

「人間といえど女性です。あなたが愛人をつくつたのだと勘違いして怒るに決まつてます！」

……。

「はあ……？ だつたらシルビアを抱いて」機嫌とりやあいいんだろ？」

「そういう問題じゃあつません……」

「あのう……抱くとか愛人とか、話しがついていけないんですが……」

「あのう……なんの話ですか……? こっちは変な印つけられてショックうけてるのに」

「ああ……すみません。実はエリクソンには婚約者がいまして、それがシルビアなんです。」

「へえ……婚約者いるんだあ……。」

「ふーん……」

「え! ?」

「シルビアという決められた女性がいながら、エリクソンは食料などと書いてわざわざナタリーに所有印までつけて……。バンパイアが所有印をつけるなんて、相当執着されてる証拠ですよあなた」

「……食料ですけどね」

あたしは一言付け加えた。

「だーかーらー……シルビアはくそじじいが思つほど、俺なんぞに執着してねえよ」

「わかりませんよ……たとえバンパイアの中でも有能とうたわれるアルカイブ一族とマリー一族の政略結婚と言つても、結婚する相手が愛人をつくつていたら女性は激怒する・る・は・ず・ですっ! …」

力説するハブロさんにエリクは呆れて溜息をついた。

「……あんたは変な本の読みすぎなんだよ」

「……はあ……。なんかよく分からぬけど、とりあえずあたしのポジショーンは物凄く良くないってことみたいね。

シリビアとか、エリクに婚約者がいようがいまいが、今のあたしにはどうでもいいことだわ。

「」の先のあたしの人生…エリクに一生血を吸われて終わりだもの。エリクがいたら、きっとあたしには恋人も出来ないし、結婚…なんて望めそうにないわね。

男と同居してる女を娶りたいなんて心のひろーい殿方なんているわけないもの。あたしだつてもし男だったら、そんな女、断固拒否だし。

「ああ……いろいろ終わつたのね。あたし。
まだ16歳なのに。
すでに人生諦めています。

「……あのを……あたしはどうすればいいの……？」

身体的にも精神的にもボロボロ…。

そんな状態で質問…。

さ、なんて答えてくれるのかしら。

「今までビーリ俺の食料やつてる」

ああ…聞くんじゃなかつた。

「お氣の毒です…」

同情…ありがとうと言つべきか、だったらもつと本氣で助けて欲しかったとか怒るべきか…。どちらにせよ傷つきますから、放つといて下さい。

「……まさかエリクソンが人間にここまで執着するとは……。…さて、困りました。このことはどうシルビアに説明しましょうか…」

「ただの家畜だって言つとけばいいだろ」

……うう……最…低…

エリク最低…。

こんな奴に少しでもバンパイアのことを理解しようとしたあたしが馬鹿だつたわ。結局その時も言い争いになつて終わっちゃつたけど…。

もう知らない。

あたしはようようと力なく立ち上がると、手摺りに掴まりながら階段をあがつていぐ。

早くベッドに潜つて、眠つて、今の状況を忘れたかった。一時でいいから。

パタン…

「……。エリクソン、とりあえずあなたを連れてここを出る話しさ無しです。どうせ出でいく気ないのでしょうから。私は一度魔界に戻ります。私もエリクソンにばかり構つてられませんので。ハア仕事が増えました」

「別に頼んでねーし。でてけでてけ」

エリクソンはハブロの背中にそつ吐き散らし、彼なりにハブロを見送つた（？）

途端にシン…とするリビング。

誰もいないと暇になる。エリクソンはナタリーに貸してもらつて自室へと向かう。

階段を登り、ナタリーの部屋を通りすぎる。

彼女の部屋からは物音ひとつしない。

寝てしまつたのだろう。

ついさつままであれだけ激しく、怒り、ショックをうけていたのだから。

「ま、明日には元に戻つてんだろ」

バンパイアの自分に唯一盾突いてきた人間だから。たいていの人間はバンパイアと分かると、恐怖に顔が引き攣り、奇声を発して逃げ出す。もしくは、命だけはとらないでくれと必死に頭をさげ、懇願してくる。

それしか能のない奴ら

そんな人間を見てきたからこそ、俺は人間を見下し、馬鹿にする。だが、皮肉なことにそんな情けない、くだらない奴らの血液を摂取しなければ、自分はこの身体を保てない。

正直屈辱だ。

バンパイアをやわな人間どもの血液なしでは生きられない身体にしたのは誰だ…？神か？

そんな奴がいたなら真っ先に殺してやる。

だが…、お前は少し他の人間とは違つた。俺が見てきた、やわで糞以下の人間とは違つた。

人間の、しかも女といつ身分であるのに、お前は俺と対等であるとする。

実に滑稽だ。

笑いがとまらねえ。

初めてあつた時から、俺はお前に一目置いてるんだぜ？ 血が上手いってのもあるが、他の人間とは違つ威勢の良さとかな。ギヤー、ギヤー、うるせー、けど。

だから俺がお前に印をつけたのは、一種の興味。

好奇心だ。

お前が俺がすることをどうな反応を示すのか。

同種の女とは違うお前に、俺を楽しませてくれる要素があると、うつすら期待しているんだ。

半ば強引に盟約の証を刻印づけられたナタリーは、少々鬱状態に入っていた。

朝から晩まで部屋に閉じこもり、食事もとらずにただベッドに沈みこんでいる。

とうとう本当にエリクソンの「モノ」になってしまったということが彼女の精神を弱めていた。

（あたしは一生エリクに血を与えるためだけに生きるのね。これじゃ、家畜同然だわ）

これまで彼に、お前はただの食事だなんだと言わされてきたが、人間として負けたくないというプライドを支えに対抗してきた。

種族自体に差がありすぎて、力の差は目にみえている。バンパイアと人間＝捕食する者とされるもの。それでも盟約は互いのリスクとコストを考慮した上での同意だった。だからナタリーは、対等な立場での盟約なのだと考えていた。

だが、冷静に考えてみれば対等でも何でもなかつた。血を一生彼に与える代わりに、下級バンパイアから命を守つてもらう。それが契約内容。でも、将来的に長い目で見て考えたらこちらの方が圧倒的に不利だ。

最近発生し、世間を騒がせている下級バンパイア。その存在は今現在は騒がれているが、同時にそれらを討伐する上級のバンパイアが現れた。その一人がエリクソン。今も何処かで奴らを始末しにあちこち飛び回つてると思われる。

そのおかげで契約どおり、一度襲われた時のあるナタリーは以前と変わらぬ平和な生活を過ごすことができている。

ここまでいい。

下級バンパイアが早く人間界から姿を消してくれれば世界中の人間は恐怖しなくて済むことができるのだ。

あとは用が済んだ上級のバンパイアも魔界に帰つてくれればいい。

……エリクも……

だが、それは叶わない。何故なら盟約は、ナタリーがエリクソンに、一生、血を捧げるというものだからだ。

人間である自分には分からぬが、エリクソンはナタリーの血液は極上だと言つていた。

彼の友人のツバイも、ナタリーを見て美味しそうだと言つている。そんな褒め言葉はちつともナタリーの心を暖かいものにしてはくれず、逆に彼らに喰われるという恐怖で北極の氷の如く凍りつかせるものであった。

それが余計、エリクソンを自分に執着させる要因となつてしまつのだ。

目の前に美味しい餌が無防備に転がつていて喰わない人間がいるだらうか。

ナタリーは彼にとつて正にそれなのだ。

もしエリクソンがナタリーを諦めるとすれば、それは彼女より美味しい血液をもつた人間が現れた時だらう。そうすれば彼はナタリーに飽きて、そちらに心変わりするはずである。

だが、不本意ながら現在はナタリーが1番になつてゐる。捕食される側としては心から喜べる数字ではなかつた。

「……はあ……」

ナタリーは枕から顔をあげ息を吐いた。

丸一日そのことだけを考えていたが、いつまでもそうして落ち込んでいる場合じゃない。自分の意思で彼とそういう約束をしたのだ。取り消してほしいなんてもう言えない。

ナタリーは首の左側につけられた赤い刻印に軽く触れる。

初めこそつけられた痛みでズキズキ疼いていたが、一日たつた今

はすっかり肌に馴染んでしまって一切痛みを感じなくなつた。

それが余計にナタリーの心を悲しみの海に沈めてしまつ。

耐えきれず、少女の溢れる思いが透明な雫となつて頬を伝つ。

薄暗い部屋に小さな嗚咽が響きわたつた。

よほど耳を凝らさないと聞こえないほどの嗚咽が、部屋の外にいるエリクソンには届いていた。

彼は今、ナタリーの部屋の前にいる。壁に寄り掛かり、腕を組みながら一人を隔てる薄い扉一枚を通してそれを聞いていたのだ。昼間はバンパイアの気配を辿り本来の役割を果たしていたのだが、力を使うとどうにも腹が空いて仕方がない。

下級バンパイアを倒すのは容易だが、ナタリーに刻印づけた時に力を大幅に使つたため、力が激減していたのだ。

そこで夜になり、家に戻ってきたところなので彼女の部屋を訪ねようとしていた所だつたのである。

いつものように乱暴に扉を開け、突入しようとドアノブに手をかけたが、瞬時にそれをやめた。

扉に耳をあてると、かすかだが声を押し殺して泣く彼女の声が聞こえてきたのだ。

普段、ナタリーは泣くといつことほしない。エリクソンが見てきた彼女は、怒るか不貞腐れた顔くらいしか見た時がない。笑つても彼女が親友のカトレアといる時だけだ。普段あまり弱みを見せない

彼女の嗚咽に、エリクソンは一瞬戸惑つた。

（チツ……あの女が泣いていようが知つたことか）

エリクソンは再びドアノブに手をかけた。

が……。

身体が扉を開こうとしない。

何故か動こうとしない。

身体は血液を欲しているといつのに。

エリクソンは苛立ち、扉からスッと一歩下がつた。

そのまま壁に寄り掛かり、静かに彼女の嗚咽が聞こえなくなるのを待つ。

（俺はなにやつてんだ……）

彼女の部屋の前で立ち往生してゐる自分がよく分からぬ。

「……」

待つっていたつて仕方がない。どうせ彼女が出てきても前回の吸血から日も経つていないから、彼女から血液を頂くにしても足りないに決まつてゐる。

エリクソンは馬鹿馬鹿しくなつてようやくその場から離れた。

帰つてきてからずつと空腹である。

ナタリーの血液を頂戴できないのならと、他をあたることにした。とはいへ、正体を明かし吸血しても支障のない人間を探さなくてはならない。

村の人間は自分の顔を知つてゐる者がちらほらいる。しかもナタリーの恋人としてだ。

正体がバレて厄介なことになつては困る。村の中では自分は彼女の恋人役を演じなくてはならないのだ。

（村の人間が駄目ならどうすっかな……）

男から吸血するのは気が引けるし、女から吸血するにしてもそれなりに美味しい血液をもつた人間じやなければ食欲が失せる。短時間でそんな人間を探すのは無理な話しだつた。

「……あ」

思い当たる節はないかと頭をフル回転させると、すぐに思い付いた。

「あいつがいるじゃねえか」

それなりに血液が美味で、しかも美しい女。

エリクソンは家を出ると、暗がりの中、村を囲うように生い茂る森の中へと姿を消した。

月下。

白い洋風の屋敷から、一人の女が顔をのぞかせる。彼女は手摺りに寄り掛かり、空を見上げた。

「…今宵は満月。なんて美しい…」

女はうつとりと感嘆の溜息をついた。

月は美の象徴。そして女としても例えられる。

「ああ…美しい。月はまるで無垢な乙女のよう。あんなに真っ白く輝いて…。男を知らない乙女のようだわ…」

女はまた一つ、溜息をついた。

「…あんなに無垢で純真な月。穢してしまいたい。真っ赤な血の色で。真っ赤に染め上げれば、月はもっと妖艶で美しい光りを放つこと間違いないのに」

女はうふふと笑い、腰までのびる白い髪をなびかせ、中庭へと降り立つた。

咲き乱れるは真っ赤な薔薇たちの間を通り抜け、女は中央の噴水へと腰掛ける。噴水の水は月光に照らされキラキラと輝きを放っていた。

女は鏡のように水面を覗き込み、そこに[写]る自分を見つめる。

[写]ったのは日の光りに晒したことがないような真っ白い肌。宝石を思わせる紫色の瞳。長く艶やかな白い髪。整った顔立ちの自分。それは誰の目から見てもこの世のものとは思えぬ幻想的な容赦。女は水面に[写]った自分を見て満足げに笑うと、顔を上げた。

「うふふ……美しいわ。わたくしはあるでの満月のようね。そう、

真っ白で穢を知らない…。ああ…でも駄目。わたくしにはただ白いだけの純真で無垢な美しさだけでは物足りないわ。そう、真っ赤な血の色で穢れてこそ妖艶な美しさを手にいれられる。わたくしには妖艶な美しさのほつが似合つているのよ。

「ねえ、そうでしょう…………エリクソン?」

女は噴水から顔を離すと、にこやかに尋ねた。

そこには黒髪に赤い瞳を光らせた青年、エリクソンが立っていた。

「ようこそ。わたくしのお屋敷へ。わたくしを真に美しくできるのは貴方だけですわエリクソン」

女は嬉しそうに立ち上がり彼に擦り寄る。

「酔狂なこつたな…。使用人はどうした。俺が入つてきても誰にも会わなかつたが…」

エリクソンは擦り寄る彼女を剥がすのも面倒らしく、されるがままになつている。

それを良いことに、女は彼の胸元にしなやかな指をスルリと滑り込ませると、耳元で甘く囁く。

「あら…貴方はわたくしの夫となるお方。このお屋敷の主となられるお方ですもの。誰も文句は言いませんわ。それに、貴方ほどバンパイアとしての能力に長けた方はいらっしゃいませんもの。皆、貴方の気配に怖じけづいて出てこれないですわ。情けないこと」
くすくす笑うと女はエリクソンの首筋に強く口づけた。

「今日はどのように用事で?わたくしを所望されにいらっしゃつたのですか?」

「……まあ似たようなもんだ。腹が減つてゐる。お前の血、よこせ」

エリクソンは女を抱き寄せ、その白い首筋に喰らいついた。

「あ……っ……。性急です」と……」

女は噛み付かれる痛みに顔を歪ませるが、恍惚とした瞳で彼を見つめた。

（ああ……わたくしエリクソンに穢されている。噛み付かれてこの白い肌から真っ赤な血を流して……）

うつとりとした表情で彼を見つめると、彼女も彼に腕をまわし抱き着いた。

エリクソンは瞳を閉じて静かに彼女の血液を貪っている。抱き合つ一人は熱烈に愛し合つ恋人どうしのように見えた。

枕に顔を埋め、声を押し殺してむせび泣いた。もうたくさん泣いた。

充分すぎるほど泣いた。もう泣かない。

ナタリーは小一時間ほど泣きつくして、やっと枕から顔をあげた。明かりもつけず、闇に沈んだ部屋。一日中閉めっぱなしだったカーテンを開けると星が瞬いている。

村を見渡すと明かりが灯つている家は一軒もない。みな就寝時間。真夜中なのだ。

ナタリーは泣きすぎて腫れぼったくなつた瞳が気持ち悪くて、一旦顔を洗おうと熱い湯を沸かした。

熱い湯にひたした手ぬぐいを絞り顔を拭うと、温かさが顔全体に伝わってきて沈んだ気分が浮上してくる。思い切り泣いたせいもあって、さつきよりは心がスッキリした気がした。

（あたしつたら一日中物思いに沈んじゃって馬鹿みたい。こんな姿をエリクに見られたら余計罵倒をあびせられることになるわ）頬をぴしゃりと叩いて弱った心に喝をいれる。自分の血液をさしだすだけで、大好きな村のみんなが平和に暮らせる。それなら安いものじゃないか。

それに、エリクソンは自分を馬鹿にしても、殺すことまではしない。彼を信用したわけじゃないが、それだけは自信がもてる。彼は自分の血を必要としてるのだから。

（そういえば…）

ふと、彼のことが気にかかる。今日は自室に引きこもつていたし、彼には一度も会つていない。

あちらから声をかけてくるわけもないのに忘れていたが。（仮にもあたしが泣いてる時に慰めにでもきたら、ぶん殴つてやるわ）

心の中で悪態をついてから、いそいで自分を叱りつけた。

（いけないわ。殴るだなんて狂暴なこと考えて。あたしは女の子なのよ？そんなこと考え方駄目）

それにしてエリクはどこにいるのか、会いたくはないのかだが気になつて仕方ない。

（部屋かしら？）

そう思つ前にナタリーの身体は自然とエリクソンの部屋へと向かつていた。

部屋の前まできて、ナタリーはぴたりと立ち止まる。何故か心臓がドキドキと高鳴つていて。

（思えばエリクの部屋にくるの初めてだわ。いや家の部屋なんだけど。あいついるのかしら？もしかして寝てる？）

ドアノブに手をかけ、思い切つてほんの少し扉を開けてみる。

中は暗い。

(やつぱり寝てるのかしら?)

あと少しだけ扉を押してみる。

今度は部屋の奥まで見えるほど開けた。

この部屋の間取りはナタリーの部屋と全く一緒に、違ひと言えば家具の配置が対称的になつてることぐらいか。

奥のほうでちらつと窓が見えた。

(カーテンが閉まつてない)

次に見えたのがベッドだった。

掛け布団は綺麗にたたまれていて、寝てると思われた本人はおらず、もぬけの殻だ。

(いない…。じゃ、どこかに出かけてるのね)

いないと分かると、ナタリーの心臓はおさまり、ホッと息をついて扉を元通りに閉めた。

もし彼が部屋の中にいてのぞき見したとなれば何を言われるか分からぬし、対応に困つてしまつ。

(いなくて良かった)

バンパイアとはいえ男性の部屋を訪ねるなど、大胆な行動極まりない。

(あたしつたら、なにやつてんの、もひ。……眠くないしあ茶でも飲もう)

ナタリーは湯を沸かしにキッチンへと向かつた。

空が白んで夜が明ける。大きな天蓋付きベッドの上で、一つの身体がもぞもぞと動く。

「…………う…………ん」

「じりりと寝返りを打ったエリクソンは隣に柔らかいものがあるのを感じて目を見開いた。

「あ、お目覚めですか？」

控えめに、はにかんだ笑みを見せたのは白い髪、紫の瞳をもつた美女。

「シルビア……」

「あれからすぐに眠りてしまふんですもの。人間界でのお仕事、相当お疲れのようですね」

白い髪の美女、もと、エリクソンの婚約者シルビアは上半身を起こして起き上がった。さらさらと長い髪がシーツの上にあがる。

「なんで俺がここでお前と寝てんだよ」

訳がわからんと頭をぼりぼり搔きながらエリクソンもまた起き上がった。

「覚えてらっしゃらないの？貴方がわたくしを所望されたのですわ

そう言つてまたはにかむんで顔を俯かせる。

エリクソンはそんなシルビアを白々しく思つ。彼女のあからさま

な演技で昨夜の記憶がすっかり甦ってきた。

「……。馬鹿言つてんなよ。俺は腹が減つたって言つただけだろ？ が。 そんで帰るのが面倒になつたからここで寝ただけだ」「

「なんだ。覚えてらしたの。つまらない
シルビアは口を尖らせて拗ねる。

「俺がお前と寝ると思つか？」「

「思いませんわ。だつてわたくし達の間にそんな不祥事が起じるほ
どの愛なんてものは一切ありませんから」

彼女はキッパリと否定した。

「だよなー。だつて勝手に決められた結婚だぜ？ お前には悪いが、
俺は」「めんだ」

「わたくしもですわ。貴方のー……そつですわね…。好きと呼ぶべ
きところがあるとすれば、吸血行為が上手いことから。あとは駄
目ですわ。自分勝手すぎますもの。わたくしは貴方の恩師であるハ
ブロ様をお慕いしていますの。彼はとっても紳士的で素敵な方です
わ」

シルビアは彼の姿を想像してついつい自分の世界に入ってしま
つている。

（俺は全否定かよ…。ていうかなんでアレが好きなんだ？ シルビ
アもナタリーも……）

ナタリー

昨日は丸一日部屋から出てこなかつた。らしくないしおらしい彼
女。昨日は結局姿も声も聞いてない。唯一聞いたのは部屋から漏れ

る小さな嗚咽だけ。今更彼女はビリビリしてこむのだろうか。

「……ナタリー……」

「ナタリー？ 誰ですのそれは」

聞き慣れぬ名前に、シルビアは綺麗な紫の瞳をぱちくつさせていく。

「え？……なんでもねえよ」

ぷいっと慌ててシルビアから顔を逸らした。

そんな彼の態度に、シルビアは歡喜の声をあげた。

「あら？ あらあらあらあらあら？ もしかしてその方、ヒリクソンの想い人ですか？」

「ふふふとからかうシルビアに、エリクソンは違うと大声で否定した。

「ち、違つ……」

「あらあら、そのわりに吃つちやつて。可愛いことですこと。教えて下さいな。その方、どんな方ですか？ 可愛らしい方？ それともわたくしのように美しい方？」

詰め寄るシルビアから逃れようとベッドからはい出るが、彼女が後ろから首に纏わり付いてきて離してくれない。

「おまつ……離せよーー！ シル！」

「嫌ですわ。せつかく貴方の初々しいお話が聞けそつなんですもの。」

話すまで」の手は離しておしあげませんわ。おほほほ

なんとか引っ張がそうとするが、余裕たっぷりに高笑いする彼女はなかなか剥がれない。

（クソッ…。これだからバンパイアの女は。見た目と違つて怪力すぎんだよ）

一人がベッドの上で縋れ合つてると、寝室の扉が控えめにノックされてシルビアのメイドが入ってきた。シルビアが幼少の頃から彼女を世話しているカマイユだった。

見た目四十代くらいの温厚な顔立ちの女性で、ふくよかな体型もさらに温厚さをかもしだしている。

「おはようございます。あらやだ、朝から未来のご夫婦揃つてじやれあうなんて、楽しそうですわねえ。エリクソン様もシルビア様のよくな美しいお方が奥様になられるなんて嬉しくてウハウハでしょう?」

カマイユはあははと大口を開けて笑い、若い二人をからかう。

「…………。

（シルビア、あのババアの口を黙らせてくれ）

（カマイユは良い人よ。そんなことおつしやらないで下さいな）

ヒソヒソとシルビアはエリクソンを叱責する。

そしてニッコリと花のような笑顔をつくると。

「カマイユ、おはよう。そうよ。わたくし、今からエリクソンとの愛を深めようと必死ですの。だから邪魔しないで下さいね。着替えなら後で致しますから、カマイユにはすみませんが、もうじばらく

してからまた来て下さいな」

シルビアが笑顔でそう言つと、カマイコはお嬢様の恋路のためならばと、彼女の演技を真に受けて嬉しそうに部屋をあとにした。
再び二人きりの空間に戻る。

「さあて……俺は人間界に戻らんと。仕事仕事……」

今がチャンスとばかりにエリクソンは腕を振りほどき田舎も部屋を出て行こうとした。

が
。

「お待ちなさい。エリクソン！お話は終わつてませんわよ。それに久々に参られたのです。婚約者が朝食も共にせず一晩寝屋で過ごして終わりとはお行儀が悪いですわよ。女と寝るためだけにきたと思われます。せめて朝食くらいは」「一緒にいきないな」

「……わかった」

「ソレしてエリクソンは腹を満たすために一時帰省したのだが、朝食をとるまでは人間界に帰れずじまいとなつてしまつたのである。

（……ここでの朝食つて堅苦しいから嫌なんだよな……。マナーがどうのこうのつて……）

「さーお食事に行きましょう？わたくしはカマイコを呼んで着替えてから参りますから。良いですね？決して勝手に帰つてはなりませんよ？貴方のためもあるんですねからね」

（ここまで言われてはもう逃げることは出来なかつた。

（朝食……なにでるんだか……）

ピチチと鳥の鳴く声がナタリーに朝を知らせる。夜中、リビングのソファで紅茶を飲んでいたのにそのまま眠ってしまい朝がきたらしい。

（う…）

ソファから起き上ると、座つたまま寝ていたせいで肩や腰が悲鳴をあげている。

（うわ、痛い。だるい）

疲労を感じながら立ち上ると、怠い身体を軽くするために、腕を伸ばしたり身体を回したりした。

（掛け布もかけずに寝ちゃったから身体が冷えてる。少し寒いわ）
ぶるっと肩を震わせると、熱い湯を浴びに浴室へと向かった。

その時ナタリーは気づいてなかつた。

鍵をかけたはずの玄関の扉が微妙に開いていたのを……。

『 ギギギ
娘の生き血を私に 』

その不穏なる黒い影の侵入を
。

危険（1）

朝食はシャンティリアのぶら下がる豪華な広間へと案内されてのものとなつた。

そこではシルビアとエリクソンの二人だけ。目の前のテーブルには、一人だけでは食べ切れないほど量の料理が並べられる。

（うわ…アルガバの肉だ。血の味がして美味しいんだよなあ）
アルガバとは魔界に生息する魔物の一種で、四つの目をもつた馬のような魔物のことをいう。真っ黒な体毛で覆われていて、走ると人間界の馬の十倍もの速さで走ると言われる魔物のことである。鉄分を豊富に含んでおり、バンパイアにとつては人間の生き血の一番目に美味であるとされているのである。

エリクソンがアルガバの肉を調理したものに目が釘付けになつていると、シルビアはくすりと微笑んだ。

「そんなにアルガバを召し上がりたいならどうぞ。なんならお持ち帰り致しますか。人間界では食べられない代物ですから」

「いや、いい。それよりお前の親は？ 昨日から見かけないが」

エリクソンはキヨロキヨロと周りを見渡した。だが、人の気配は全くしない。

「わたくしの両親は、別邸におりますわ。一人して旅行にでかけたのです」

「ふーん…」

「そうか、とエリクソンはフォークでグサツとアルガバの肉を突き刺しながら頷いた。

「そういうえば人間界に行つてからアレは倒しましたの？」

アレとは人間界で大量発生中の下級バンパイアのことだ。

「まあな。毎日じゃないが、一日に一度は出でてくる。弱いくせに面倒増やすなつての」

「… そうなんですの。アレは卑しい生き物ですからね。たまにわたくし達と同じ生き物として扱われますけど、あんな低俗なものと一緒にしないで欲しいですわ」

「まつたくだな。お前らのためにわざわざ人間界にいかなきやならない俺達の身にもなれつての」

エリクソンはぶつぶつと口頭の文句を言った。本人に言つても俗なバンパイアゆえに理解出来ないからだ。

「もう少し言葉の分かるやつならいいのによ」

「それでしたら、なにも倒しに行かなくてもよくなりません」と？

「まあな。でもアイツら、頭悪いくせにどの人間が美味しいかは分かるんだぜ？」

「きつと生き血を啜ることしか考えないからですわ。それしか能がないので、美味しい人間を嗅ぎ分けるのに長けているんですわ」

シルビアは、ああ卑しいと言い放ち食事を続けた。

（卑しい生き物ね。確かに。血が欲しい血が欲しいって五月蠅いつつの。ま、あの辺一帯は排除したから当分は出てこないだろ）

エリクソンはナタリーの住む小さな村を思い浮かべた。森に囲まれ、緑溢れる村。村人はそう多くはないが、土地が広く、牧羊をしている者が多い。そのため市場では牛や鶏よりも専らラム肉が売られているのである。

（そういえば出来損ないは、羊も喰つてたな…）

羊の血など美味しいのかは分からぬが、動物の生き血など、エリクソンには興味がない。

一応村の敷地内で見つけてしまつたからには倒していくが、奴らに喰われた羊の死骸などを見ても食欲は一切湧かない。（やっぱ俺は人間の血液に限る）

そう思つて、村の中にナタリー以外にも美味そうな人間はいかないかと、暇な時に市場を歩いてまわつたりする。

黒髪に赤い瞳。全身漆黒の洋服という目立つ格好のため、村人の注意をひきやすく、探しにいかずとも人間たちが寄つてくる。大半は村に住む少女や女どもで、カッコイイですね、とか、遊びに行きましょと五月蠅いくらいに言い寄られる。

エリクソンはその度に適当に受け答えしつつ、人間の品定めをしたものだ。

結局は、ナタリーほど美味しい血液をもつた村人は一人もいなかつたのだが。

思い出すだけでも堪らないくらいナタリーの血液は極上だ。

彼女の白い肌を貫き、心臓の鼓動に合わせてとろりと溢れだす赤の液体は、濃厚で芳醇なワインそのもの。

くせになる深い味わい。

次はいつ飲めることができるのか。エリクソンはそればかり考えた。

目の前に残るアルガバの肉も、彼女の血液と比べたら大したこと

はない。ヒリクソンには先程まで食べていたアルガバの肉料理も、味気無く感じてきた。

(そろそろ行くか)

シルビアには充分付き合つた。ナタリーの血液を考えたら、欲しくてたまらなくなる。新たに湧いてきた衝動を抑え、頃合いを見計らつて御暇するとしよう。

そう思い、さりげなく席を立とると腰をあげた瞬間、ふと向かい側に着席したシルビアの目が光つた。

「まだデザートがありますの。それまではわたくしのお話に付き合つて下さいな。ああ、そうでしたわ。危うく聞くのを忘れるところでした。ナタリー…とおっしゃいましたわね。その方、どんな方なんですか？」

シルビアは危うく面白い話を聞きそびれる所だったと、くすくすと軽やかに笑つた。

「……」

どうやらシルビアはその話をするまでは帰してくれないらしい。恋愛話に花を咲かすのが好きなシルビアに、これだから女は、と心中呆れた。

その頃ナタリーは熱い湯を浴びて、疲れた身体を癒していた。さつきまで身体の節々が痛んでいたが、あつたまつた身体からはそれが嘘のように消え失せた。

バスルームの窓から朝の暖かい陽射しが差し込んでくる。新しい一日の始まりを予感させて、昨夜まで沈んでいた心がリフレッシュしていく気がする。身体を洗い流し、心に溜まった鬱憤や悲しみも洗い流されたみたいだ。ナタリーは気分爽快でバスタイムを楽しんだ。

そろそろ上がるうか、と浴槽から立ち上がるうとした時……
ガターンッとバスルームの外から大きな物音がして、ナタリーは固まつた。

(なに……今の音)

扉が揺れるような音だ。

(……誰かいるの……)

不審な物音に動けないと、今度は外から女性の悲鳴まで聞こえてきた。

「きやあ————！」

断末魔の叫びとも言える凄まじい悲鳴にナタリーの心臓は早鐘を打つ。

(外で何か起こったの)

はやる心臓を抑えて耳を澄ましていると、ざわざわと村人が集まつてきましたらしい。遠くて聞こえづらいが、人が死んでる、早く医者を！という言葉が聞こえてくる。

(人が死んでる？どういうこと。誰か殺されたの)

外の状況が気になる。平和な村に、暗雲が立ち込めるのを感じた。

嫌な予感がする。

さつきまで外からは爽やかな朝をつげる光が差し込んでいたのに、今は暗い。

ナタリーの不安を表すかのように、太陽が雲に隠れてしまった。

(とにかく確かめなくちゃー！)

そう思つて浴室から勢いよく出ると、またガタンッと大きな音がした。

(やっぱり誰かいるんだわ。まさか…村の誰かを殺した犯人?!)

頭に通り魔の文字が浮かび、全身に緊張がはしる。

浴室を抜け、慎重に脱衣所までくると、ガタガタと扉がひとりでに動いていた。

何者かが脱衣所の扉をこじ開けようとしている。

ナタリーはそう確信した。

幸い、扉は鍵がかけられていて簡単には開かない。だが、それも時間の問題だろう。

扉は今にもぶち破れそうなほどガタガタと揺れ、ガタンッと音をたてている。

(どうしよう。どうしたらいい?!)

もし扉が壊され、犯人が侵入してきたら今の自分じゃ太刀打ちできない。浴室にも、脱衣所にも、武器となるものは一つも見当たらぬ。

逃げようと思つても、浴室の窓は小さなすぎて通り抜けることは不可能だ。

(どうしよう。どうしよう)

今にも壊れそうな扉を目の前に、ナタリーは慌てた。

考えなれば。考えなくちゃー！

とにかく裸のままではダメだと脱衣所から服を掴みとり、浴室の扉をしめて身を潜めることにした。

素早く衣服を身につけ、なるべく音をたてないようにその場にしやがんだ。

気配を消したらいなくなってくれるかもしれない

今はそう願うしかなかった。

もし侵入されて見つかったら、なんとしても抵抗して逃げだそ
う。

ナタリーはそう決意した。

危險（2）

シルビアの尋問タイムは休む間もなく続いた。その間、エリクソンは黙秘権と称してだんまりを決め込んだ。

人間と同居して？

しかもそいつと恋人って設定で？

やうには極上たる血液に目が眩んで、盟約まで交わして?

そんな」と

言えるか！ボケ！！

しかし、シルビアがそれを許すはずもなく、逆にだんまりを続け
れば続けるほど、彼女の中に知りたいという欲望が膨れ上がり…。
意地でも吐かせようとどこから湧いたのか、メイド達に俺を取り
押さえさせ、自分は上質な羽扇をもつて、あらうじとか俺の弱点…
右脇腹に突っ込んできたから堪らない。

「ひぐつ」

変な声が出た。

る。

（…………。負けるか。むず痒い……むず痒いが、こなひとつでもする
俺じやねえ）

「ヒリクソン。さあさ、白状なさいな。ナタリーとは誰なのです？もちろんあなたの思い人なのでしょう？わたくしをお会いしたいですわ。わたくしちょうど女のお友達が欲しかった所ですの」

シルビアは羽扇を持たない左手で口元を隠しつつクスクスと笑う。

「（…）お、お、そこは… そんなにじゃあ… ねえ！… ふはは、おま… やめ、やめ、ふははは」

「じゃあ何なんですか？わたくし氣になりますわ。あなたの口から女性の名が出るなど珍しいんですもの」

（く…。この性悪女め。いくら上品な口調や仕草したって、こういう悪趣味な女だってことがハブロにバレたらどうなるか分かつてんだろうな…）

ハブロは今時にしては非常に珍しい頭の古い男だ。それは考え方が古いつて意味で、別に年寄りなわけではない。

彼は廃れゆくマナーと文化を尊重する古風な考え方をするバンパイアで、例えば誰かと恋愛したいと思つたら、その相手にはまず手紙を送つて挨拶し、手紙でもつて会話をし、手紙でもつて愛を囁いてオーケーが出たらやっと付き合うところ、お前… いつの時代のバンパイア？と言いたくなるほど超超古風な奴なのだ。ちなみにいま、奴にそういう恋人はいない。

ただそういう恋愛をしたいと言つていたのは確かだが。そして奴の女のタイプは上品で奥ゆかしく清純な女らしい。

（どんな女だ。そんな女今の時代いるのか？と突つ込みたくなる。だから悪趣味をもつシルビアは、どう考えたって奴のタイプ外に決まってる。まつたくじじくさい…）

そういう彼の性格から、エリクソンはいつの間にか彼をじじいと呼ぶようになった。ハブロは始めこそ嫌がつたが、今はもうじいといつ呼び名で呼ばれることを諦めている。

エリクソンはむず痒さでひくつく身体を抑え、田でシルビアを威嚇した。それを彼女は

「あらやだエリクソン。田はわたくしを射るような強い眼差しですのに、口元は笑っていますわ。わたくしを見て、いやらしいことをご想像なさつていいのね」

ポツと頬を赤らませ、恥ずかしそうに俯いてみせた。

しかし、右手に握られている羽扇は相変わらず俺の右脇腹を絶妙なタッチでまさぐり続けている。

（ここの……くそ……ちげーし……その羽扇の動きを今すぐ止めろ……！）

そう叫びたいのに、笑いをこらえるのに必死すぎて声すら出せない。

（うはなったが…）

最終手段だ。

エリクソンは笑いを堪えながら大きく息を吸い込み、それを一気に吐き出した。

「あああ……窓の外にハブロの奴が……」

「え？」

しめた。シリビアやメイド達が窓の外に気を取られた瞬間、エリクソンは身をよじりせ逃げ出した。

「それも…」

エリクソンの身体を押さえていたメイド達は軽く突き飛ばされ悲鳴をあげた。

その声にふるがえるシ川ヒア

「あつ？！エリクソン、わたくしを騙しましたのね」

ふくつと拗ねるシルビア。

(お前のほうが先にやつてきたね…)

「いやんな古典的な罠にひっかかる方が悪い。じゃあな」

メイド達の間を摺り抜け、エリクソンはまんまとシリビアのもとから逃げおおせたのである。

「まったく。素早いですこと。結局分からずじまいでしたわね」

シリビアはホウ：と溜息をついた。

「次回の逢瀬を楽しみにしておまかわ」

「……やつと二つち（人間界）に来れた」

なかなか帰してくれないシルビアから逃げるよう人に人間界に戻つてきた。エリクソンにはたつたの一晩の滞在が、一週間にも一週間にも長く感じられていた。
(あいつと関わると疲れる……)

肩を回しながら、村はずれの教会から外へはい出た。
実は、ナタリーと初めて出会つたこの小さな教会を通じてエリクソンは魔界と人間界を行き来していた。
バンパイアはどこにでも穴を開け、行き来することが出来る。
が。

エリクソンにはこの教会が建つ位置が自分の波長と合いやすく、簡単に穴をあけることができるの、ここを利用していたのだ。
ちょうど人間界にきた時にナタリーとここで出会つたのは、魔界から移動し終えたエリクソンのところに、たまたまナタリーが入つてきた、という運命の悪戯によるものだつたのだ。
(よもや今に続く関係になるとは思つていなかつたけどな)

すたすたと村を囲む森を抜けると、だんだん民家が見えてくる。煙突からはもくもくと煙りが立ち上り、村人が働きはじめる時間帯なのだということを告げている。

（ふああ… 今日も呑氣だな。この村は）

民家から煙りが立ち上り、動物たちが田を覓まして広い柵の中で餌である草を食んでいる、のどかな景色を見ていると無性に眠くなる。

（昼寝でもするか）

適当な民家の屋根でも借りて一眠りしよう、そう思つて屋根によじ登ろうとした時、人だかりが目に入った。

（なんだあれ）

人だかりは円になつて、中心に何かを囮んでいるような形になつてゐる。目を凝らして見ると村人の様子がおかしい。何があつたのか？と思うより先にエリクソンは気づいた。

（…こいつは）

エリクソンは一氣に人だかりの中へと走つていく。

「トーマスが！トーマスが何者かに殺された！」

「なんてことだ。この村で殺人が起るなんて」

「誰よつ誰がこんなことしたのよ！…」

「こんな小さな村だ。都からも離れてる。ということは犯人は村の誰かなのか？！」

「そんなん。恐ろしい！」

パニックに陥っている村人たちはすでに冷たくなつて地面に倒れている中年男性トーマスを見下ろして口々に叫んでいる。

「サム先生、トーマスは、トーマスは本当に死んだんですか？！」

村人の一人がトーマスの脈をはかり、死を告げたサムスンに一步あゆみでて言った。

サム、もといサムスンは村で唯一診療所を営んでいる医者だ。

人が死んでいるとの報告を受け、すぐに駆け付けたのだが、トーマスの心肺はすでに停止。

全身蒼白。顔は何者かに襲われたせいか恐怖に引き攣つたままの状態だ。田はぐりんと白目を向き、慌ててサムが脈を測り、心肺蘇生をして助けようとしたのだが、途中で異変に気づき、蘇生は既に無駄なことに気づく。

トーマスの身体はくまなく調べた。外傷はほとんどなく、遺体は綺麗なままの状態。なのに全身はひどく蒼白で血の気が全く感じられない。死んでいるのだから当然なのだが、まだ死んで間もないはずなのに、ここまで蒼白なのは異常だった。

（なにかがおかしい…）

サムが首を捻つたその時だった。

「ああ！トーマスが生き返った！！」

「本当だ！サム先生が助けたんだ」

わあと村人たちが歓声をあげた。

（な？！）

サムスンは絶句した。なんと、たった今死んだと判断したはずのトーマスがむくむくと身体を起こし始めたのだ。

（まさか！トーマスは死んでいるはず…）

脈もない。

これっぽっちの体温すら感じなかつたのだ。

（そんなはずは…）

サムスンは信じられない光景に、もう一度彼の右腕を掴んだ。脈は

やつぱりない。

（馬鹿な！脈がない。心音がかんじられん。体温も…一切だ。なのに彼は動いて…。どういうことなんだ！）

にわかに信じられぬ光景にサムスンはたじろぐばかり。

「トーマス、トーマス大丈夫か？顔が真つ青だ。一体何があつてこ

んな所に倒れて.....さやああーー！」

中年の男が歩みでて、起きあがらうとする彼を手伝おうと手を差し出した瞬間、ガバッとトーマスが彼の腕に喰らいついたのだ。

喰らいつかれた男は真っ青になつて腕を振り払おうと助けを求める。

一番そばにいたサムソンはすぐさま彼の腕からトーマスを引きはがそうと力を込めた。

「誰か！みんなも手伝ってくれーーー！」

慌ててサムソンは周囲の人間に助けを求めた。だが、トーマスの暴走に彼の様子がおかしいことに気づいた村人たちは、加勢しようとせず、サムソンを置いて散り散りに逃げ去ってしまう。

ボブを助けようとするサムスン一人を置いてみんな逃げていって
しまった。

だ。

とてもじゃないが一人で対処できそうにない。

だが、それでもサムスンは医者として人を助けようとする使命感からか、一人とり残されても腕を噛み付かれて苦しむボブを見捨て

るなんてことは出来ない!

「やめるんだトーマス、この人はボブだ！分からぬのか？！」
トーマスを説得しようと試みるも、彼にはサムスンの言葉など届いていない。白田剥き出しにしてボブの腕を噛みちぎらんとしている。もはや化け物

「つぎやあああ

ボブが悲鳴をあげる。のボブの腕も限界だった。ミシミシと骨が鳴っている。

肉を切り裂き、骨まで歯が達しているのだ。
もう彼の腕は使い物にはならないだろう。

（くそつ、くそ！…どうしたらいい…）

たつた一人、彼を助けたいのにそれが出来ない自分にサムスンは悔しそうに唇を噛んだ。

と。
。

「あーあー…。やあっぱりなあー」

サムスンの背後から若い男の氣怠い声が聞こえてきた。

ハアと溜息が聞こえる。

誰かがまだ残つてくれた。

サムスンの心に希望の光が降り注ぐ。

サムスンは声の主を振り向き、すぐさま応援を頼んだ。

「君、頼む！ボブから彼を引きはがすのを手伝ってくれ……」

切羽詰まつた声で懇願した。

（一人じや駄目だが、二人いれば止められる）
そう思った。

「ああ、いいぜ？」

若い男 ハリクソンはゆっくり傍に歩み寄ると、片手でトーマスの顔面を押さえ付けた。同時にボブの身体がやっと解放され、ボブはその場に倒れこむ。

『うう…ぐああ！』

ハリクソンに顔面を握りつぶされんぐらいの力で掴まれ、トーマスはうめき声をあげる。

「へつ…。苦しいがよ？人間以下に成り下がったテメエも苦しむもんなんだなあ？」

ハリクソンは片手でトーマスの顔面を掴み、身体ごと軽々と上げる。

『……………ぐ』

トーマスの身体は地面から足が離れ、宙に浮く形となる。

（なつ……）

サムスンは目を見張った。自分でさえトーマスの暴走を抑えるべ

「うか、引きはがす」とさえ出来なかつたのに。

突然現れた細身の若者に、どににそんな力があるのだらうか。

「や...君は...」

「...」

サムスンの言葉を無視し、エリクソンはさらに腕に力を込める。

《「うぎやあああ ーー」》

トーマスは足をばたつかせてもがき苦しむ。

「や、君! そんなことしたらトーマスが死んでしまつーー!」

「...あ? どうに死んでるだろ。だからこいつして 」

サムスンに一警もくれず、エリクソンは一気にトーマスの頭を握りつぶした!

瞬間、バタバタと脳の破片や頭蓋骨のカケラが無惨に辺りに飛び散つた。血液は一滴たりとも出でこない。

「...あーあ。手が汚れた」

首から下だけになつたトーマスの身体を地面に投げ捨て、エリクソンは自分の服で手を拭う。そして、じりりとその深紅の瞳でボブを見つめた。

「...ひい...ーー」

たった今、トーマスを殺された瞬間を目にしたボブは、エリクソンの獲物を捕らえるような鋭い視線に見つめられ、痛めた腕のことなど忘れて後ろに後退した。

「……てめえもだな」

エリクソンが静かな声で一步ボブに近づく。サムスンはエリクソンが何をしようとしているのかを悟り、すぐさま一人の間に割つてはいり、ボブを守るように立ち塞がつた。

「き、君つ！ボブは正気だ！トーマスに襲われていただけなんだ！彼を殺す理由なんとない！」

サムスンの声は微かに震えている。

「……」

構わず、エリクソンはボブに手をのばす。

「ち、近づくな！この殺人犯め！…」

「…………。ハア……。もうそいつは手遅れだ。そのうち正気じゃなくなる。さつきの奴みたいにな。死にたくなかつたらせつとじどきな」

「嫌だ！僕は医者だ！人を助ける使命が…………うぐっ」

視界が薄れる。

目の前が真っ暗になっていく。

（く……そ……）

サムスンはどんぐん意識が遠退いていわ……………その場に倒れた。

そして…。

「てめえも死ね。人間」

ヒリクソンが歩み寄り、彼に手をかざす。

「ひいい…！…！」

ボブが何か声をあげる前に、ザシュー…と風をあわる音がして、彼は静かに息を引き取った。

「さて……………こつらの根源はどーだあ…？」

扉がミミシミシと音をたててている。鍵も、蝶番も今にもはじけどびそうだ。

ナタリーは冷汗をかきながらバスルームで息を潜めている。
(扉が壊れたら誰だか知らないけど、決して善人じやない人が入ってくるわ。そしたらあたしは…死ぬのかしら)

扉をぶち壊そうとしている者は人殺しか、誘拐犯か、あるいは空き巣か。

(空き巣がこんな物音たてないわ。前者のほうね、きっと)
叩きつけられ、歪んで今にもはずれそうな扉はもう限界だ。

時間稼ぎももう終わり。覚悟を決めなければならない。

(次の衝撃で扉は壊れる。来るわ)

ナタリーは汗ばんだ手を胸の上でギュッと握りしめて覚悟を決める。

そして。

バキヤアツ…!!

家が壊れてしまうのではないかと思うほど大きな音と共に、脱衣所の扉は限界を迎える。バタンと枠から外れて倒れた。

そしてズリッ…ズリッ…と床を引きずる足音が耳に響いてくる。

(来た。入ってくるわ 戰わなきや…戦わなきややられる)

しかし気持ちとは裏腹、身体が、手が、恐怖心に翻え力タカタ震え始める。

心臓が早鐘を打っている。覚悟したつもりなのに、侵入者と自分を隔てる壁が一枚壊されてしまったかと思うと、決意した心が簡単に折れてしまいそうになる。

（ナタリーしつかりしなさい。あたしは父様と母様のぶんまで生きるつて決めたんだから。ここで人殺しに殺されるわけには行かないのよ。それに隙をつければ振り切れるかもしれないじゃない）

緊張する中、ナタリーはバスルームをぐるっと見渡した。

そしてあるものに目が止まった。

（そうだわ。これなら一瞬の隙をついて逃げられるかもしれない）

頭に浮かんだ打開策。

これなら

。

ナタリーはすぐに行動に移す。

もう侵入者がすぐそこまでできている。

時間はなかつた。

（早く早く！）

急がなければ

！

狭いバスルームの切羽詰まつた状況で、ナタリーはあるものを準備した。

そしてついにその瞬間が来た

：

ダーン！！！

「きやあー」

凄まじい勢いでバスルームの扉が弾き壊される。まるで大砲の弾でも撃ち込まれたような衝撃だ。身構えていたナタリーでさえ、予想だにしなかつたあまりの衝撃に耐えきれず、狭いバスルームの壁に華奢な身体を強く打ち付けることとなる。

「あうっ！」

少女は背中を強打し、床にざるりと崩れ落ちる。

「……っ……」

（……何？ 今の、人間の力じゃない）

何が起きたか分からぬ。けれど身体中が痛くて動けそうには分かる。

激痛で意識が遠退きそうになる中、半開きの目で事態を把握しようと試みる。

「……？！」

（な……）

ナタリーは絶句した。目の前の光景が嘘であつて欲しいと切に願う。

（……なんで……）

そこにいるのは人殺しだも、空き巣でも、そもそも人間でもないものが存在していた。

カタカタと身体が震える。唇が急激に渴いて体温が低下していく。ナタリーに絶望が襲いかかる。

敵うわけない。

そもそも人間ですらない。

そう、獲物を仕留めた獣のような赤い瞳で見てくるコイツは……

「なん……で……なんで……？」

どうして狙われるのは自分なのか。目の前にたたずむ黒い化け物は荒い呼吸をし、口元からは、だらだらと涎を流してバブルームの床を汚している。初めて近くで見るそれは、皮膚は黒く、よく見ると小さな突起が無数に広がっている。

頭は髪の毛は一切生えておらず、顔に鼻はない。エリクソンを思わせる深紅の瞳と左右にパッククリ裂けた大きな口があるだけだ。ただ、深紅の瞳はエリクソンのほうが遙に綺麗で妖艶な光を宿しているとナタリーは思う。

目の前の化け物は、ただ本能のままに獲物を喰うことに専念しており、瞳孔は開ききつて完全に狂氣の化け物でしかない。そのグロテスクな姿と全身を襲う恐怖に吐き気がする。

さっきまで隙をつければ逃げられるかもしれないといつ浅はかな考えはもうナタリーの脳裏にはない。

熱湯でもつて相手を怯ませて逃げ出そうなんて。化け物相手に通じる策ではない。

「うう……」

化け物がぽつぽつした黒い腕を伸ばし、ナタリーの首を掴んで持ち上げた。化け物は嫌らしく舌なめずりしてあたしを見る。

（殺される。生き血を啜られて、あたしは死ぬんだ）

涎の垂れた汚い口元からのぞく鋭い牙。これに噛み付かれたら終わり。

（ここで死んだら、エリクからも開放されて父様と母様のもとに逝けるのかしら）

そんな考えが頭をよぎる。

そうだ。エリク。侵入者から逃れることばかり考えていて彼の存在をすっかり忘れていた。

今こそ彼の出番なのではないか。

けれど、彼は昨日から出かけていて一瞬もその姿を見ていない。

今朝だって家の中に彼の気配は感じなかつた。

（盟約だなんだつてあたしにうるさく言ってたくせに。肝心な時に来ないじゃない。馬鹿）

首を絞められ、意識が今度こそ消え入りそうになる中、呼吸もままならない状態でナタリーは精一杯悪態をついた。

死を目前に、通常ならもうあきらめているはずの状態。

だが、彼を思い出した途端もしかしたら来てくれるのではないかとナタリーの心は期待し始めていた。

それが化け物を目の前にして、死を目の前にして、悪態をつけるほどの生きる活力を彼女の中に呼び覚ましたのかかもしれない。（早く来なさいよ。エリク。あなたがわざわざ刻印までつけた人間は今にも殺されそうよ。いいの？それとも他に美味しい血液をもつた人間でも見つけたわけ？もしそうだとしてあたしを助けに来ないんだつたら、これまであたしにした暴言と盟約違反で一生怨んでやるんだから！）

気道をふさがれ、ヒュウヒュウと喉がなる。体から力が抜けていく。もう意識も持ちそうにない。

残された意識で壊されたバスルームの扉の奥を見つめても、エリクソンの姿はない。

化け物の腕に力がはいり、いよいよ見れるのもおぞましい顔がナタリーに近づいてくる。

（ああ…、もうダメ…）

ナタリーは力が抜け落ち、思い臉を閉じた。

『ギャアアアアアアアーーー！』

化け物の苦痛を訴える一声が響きわたる。

化け物は身悶え、床を転げ回る。ナタリーは床に落なし、咳き込む。

彼女を捕らえていた化け物の腕は綺麗に切断されていた。
彼女がそれを確認すると、頭上から聞き慣れた男の声が耳に入つてきた。

「まさかこんなとこにいるとはな」

エリクソンはやれやれと化け物に向かつて咳いた。そして足元に倒れているナタリーを見下ろし、弱弱しく見上げる彼女と目を合わせた。

「随分ぼろぼろにされてんな…」

エリクソンはその場にしゃがみ込むと、まるで彼女を労わるかのようにあおく痣になつた首筋にそつと手を触れた。

温かい彼の手が、残された傷痕を確かめるように首を這う。

まだ呼吸が整つていらない彼女は咳き込みながらおとなしくいつになく優しい彼の手の平を感じていた。

本当に心配してくれているのかと錯覚してしまうほど、それは優しい。ちゃんと来てくれた。そのことが素直に嬉しく、胸が安らぐ。盟約なのだからこれはエリクソンにとつては義務。当然のことだ。盟約を交わしたナタリーにとつても助ける行為は彼に与える血の代価として支払われるべき当然のことなのだ。

彼が盟約だからという理由で助けてくれるのだとしても、命を救

つてもらつて喜ばない人間なんていないだろ？

（変なの。エリクがきてくれて嬉しいなんて。これは当たり前のことなのよ。それにあたしの血が欲しいからエリクはそうしているだけ）

それでも彼の温かい手が触れたところから、心身ともに緊迫が解けていく自分がいるのは事実だ。

（エリクがいてこんなに安心するなんて）

両親が亡くなつてから、一人気丈に振る舞い、人に頼ることをやめた彼女にとつてこんな気持ちになるのはカトレアといる時以外では初めてのことだ。

（しかも相手はバンパイアなのに）

彼女自身、彼にこんな気持ちを少しでも感じてしまつたことに困惑を隠せないのだった。

エリクソンは彼女の首の痕を確かめると、スクッと立ち上がり、のたうちまわつてゐる化け物に向かつて吐き捨てる。

「てめえ…、覚悟できてるんだろうな」

エリクソンはボキボキと手を鳴らして怒りを露にしている。怒氣をぶつけられた化け物はエリクソン睨みをきかせ、ぐつと身構える。だが、その目はまだナタリー一点を捕らえていた。

「余裕だなお前。俺に目えつけられて『オイツを狙うとは良い度胸だ。その上、村の人間にまで手えだして……。』ひとつとしては無駄な労力つかうから嫌なんだつつの。なんとかしる、その無駄な感染能力。これ以上面倒増やすな、下衆」

エリクソンなんて眼中なしの化け物に少々苛立ちを覚えたが、静かに右手を化け物に向け。

「死ね」

光の球が放たれたと同時に、化け物は声を出す間もなくあとかたもなく消え去った。

気がついた時はナタリーは自室のベッドの上であった。そばにはブロンンドのクセのある髪と碧の瞳をもつた優しそうな顔した男の人と、カトレアがえぐえぐ泣きながら控えていた。男の人は村で唯一のお医者様のサム先生で、「おはよう。調子はどうだい?」と天使のような笑みを浮かべていて、心が少し和らいだ。カトレアはナタリーが目を覚ますなり泣きながら飛びついてきて、「良かった。良かった」とそればかり連呼している。

どうして一人が部屋にいるのか状況が飲み込めなかつたが、起き上がろうと身じろぎした時に全身に痛みが走つて、自分に何が起つたのかのかを思い出す。

（あたし、そうだわ。襲われて、首をしめられて……最悪）

先生は起き上がろうとするあたしを制し、ベッドで横になるよう促して優しく事情を説明してくれた。

バスルームでバンパイアに襲われた時、全身を強打したあたしは意識を失い、エリクに自室まで運ばれた。エリクは即、お医者様のサム先生を連れてきて診るようになに言つたそうだ。そのときサム先生は大変驚いたそう。なにせあたしは全身打撲に、身体は痣だらけ。骨折は無かつたそうだが、首には締め付けられた手形がくつきりと残つていたのだから。

そこで真っ先にあたしの怪我の容疑をかけられたのはエリクだ。

先生が疑いのまなざしでじろりとエリクを見回すと、意図を汲み取つたエリクは仏頂面で「俺じゃねえ」と言つたらしい。まあそんなんだけど。先生からみたらどう見ても相当な暴行を受けたとしか思えない。先生はすぐさまエリクに問いただした。でも、彼は違うと言つた。エリクはすぐさまエリクに問いただした。でも、彼は違うと言つた。そしてカトレアにはナタリーが暴行にあったなどといえるわけもなく、事故と偽りの報告をし、家にきてもらつたらしい。

(だからカトリアは君が事故にあつたと思つてゐるからね)
最後にそう耳打ちして。

「そうだつたんですか。ありがとうございます先生。カトリアも来てくれてありがとね」

「うう…当たり前よ。だつて友達じゃない。あたし、あたし、びっくりしたのよ。あんたが全身打撲で痣だらけだつて。事故にあつたつて聞いて。ああ、もう、本当に…。女の子なんだからもつと身体を大事にしなさい…」

カトリアは一喝すると泣きやむ様子もなく、ナタリーに抱きついて泣きじゃくつた。こんなに心配してくれる人がいる。

（あたしは一人じゃない。こんなにあたしを心配してくれる親友をもつて、あたしは幸せね）

ナタリーは自分のために大粒の涙をこぼしてくれる友人に心がポツと温かくなるのを感じた。

「ごめんね心配かけて。あたしは大丈夫よ。今はちょっと痛むけど、しばらく休めばまた動けるようになるわ。ねえ先生、そうでしょう？」

にこりと微笑んでみせる彼女につられ、サムスンもふつと笑みをこぼす。

「ああ。大丈夫だよ。でもまだまだ痛んでうごけないはずだから、完全に治るまではゆっくり休むんだよ」

「はい。ほりあ、あたしは大丈夫よ。そんなに泣かないでよ。死んだわけじゃないんだし」

「だあつて…。ナタリーが事故にあつたなんて聞いて、しかも先生に急ぎ来るよつて言われて…。本当に生きた心地がしなかつたのよ」

カトレアは顔をあげハンカチで涙をぬぐつた。

隣からサムスンが申し訳なさそつにカトレアに謝罪する。

「あ…じめんね。それは僕のせいだね。言い方がまずかったかな。彼女は無事だと云えとけばよかつたね」

サムスンは罰が悪そうにぼりぼりと頭をかく。そのしぐさが、大人にしては少し頼りなくて、それを良いことにカトレアはちょっとぴり意地の悪い言い方をする。

「本当ですよ、先生。言葉には氣をつけてください。あたし、びつくつしそぎて心臓が止まるかと思つたんですから。お医者様に言葉で殺されそうだったわ」

「ええ…」

「ちよつと、カトレア、言こすきー。」

ナタリーが注意すると、カトレアは「じめん、ヒペウツヒ可愛く舌を突き出しげみせる。

「こやこや」じめんね。僕も言葉が少なかつたから。今度は氣をつけろよ」

「やうしてください」

「いらっしゃー！カトレアー！」

途端、あはは、と三人の笑い声が響き、一時和やかなムードになる。カトレアからも涙は消え果ていた。

「あー、でも気がついてよかつたわ。あたし、家族にもこのこと言つておくわ。ナタリーは無事よつて」

「せうしてくれると嬉しいわ」

「あー、あたしそうそろ行くわね。家の手伝いをしにいかなきや。またお見舞いにくるから、今よりはマシになつてよね」

「ええ。約束するわ」

「じゃあ、先生も。あたしはこれで失礼しますね」

「うん。また」

ナタリーとサムスンは去つていいくカトレアを笑顔で見送った。二人は顔を見合わせるとまた、ふふと笑う。

「いいお友達だね」

「はい。カトレア以上に親友と呼べる人はいないくらいですから

ナタリーは幸せそうに優しく微笑む。聖母が微笑むような慈愛に満ちた笑顔だった。

「さて、最後に首の包帯を巻きなおしてもいいかい？襟であまり見えないけど、痣は人に見せたくないだろ？」

「……。はい……」

ナタリーから笑顔が消えた。少しからだが震えている。暴行にあつたときのことを思い出しているのだろう。そつと襟を開き、包帯でその痛々しい傷痕を覆い隠してやる。サムスンが診たところ、肩や背中の痣もひどいかつたが、首筋についた手形の痣は特にひどかつた。

（可哀想に。女の子がこんな目にあうなんて）
サムスンは彼女のことと思い、暴行されたことは公にせず、事故にあつたということにしてくれていたのだ。

「はい。これで見えないと思つかい」

キュウッと包帯を留め具で固定し、サムスンは手を放した。

「ありがとうございます」

ナタリーはぺこりと頭をさげた。おもむろに部屋を見渡すと、「エリクは？」と尋ねてきた。エリクソン。その名を聞いた途端、サムスンの表情が曇る。なんとなく重い空気が流れる。

「あの、先生？」

訝しげにナタリーは首をかしげた。

「……。ナタリー、君に一つきいてもいいかい？」

「？はい」

突然真剣になるサムスンに、ナタリーは「ゴクリ」と唾をのんだ。

「君の恋人のエリクソン。彼は、人間なのかい？」

「えつ……」

ナタリーの心臓がとびはねた。
(どういう意味？先生はエリクの正体を知っているの？バンパイアってこと知ってるの？)

「あ、あの…、それはどういう意味で…」

困惑して声が上ずる。サムスンは彼がバンパイアと知つていいいるのだろうか。だとしたらいつバレたのだろう。ナタリーには全く検討がつかない。彼は真剣だ。

「先生？」

声をかけても彼の反応はない。ナタリーはサムスンが言葉を発するまでしばらく待つことにした。

サムスンはカトレアを呼ぶ前のことと思い出していた。
エリクソンに気絶させられ、そう時間もたつていないうち

「おい、おきる医者。今すぐ来い」

肩のあたりを蹴られ、無理やりおこされた。殴られた鳩尾みぞおちが痛み、

う…とうめき声があがる。目が覚めて見上げれば、そこには鳩尾を打つた張本人がたつていた。

「き、君は……。」の、人殺し。ぐあつ「

頭を踏みつけられ、地面に顔をなすりつけられる。

「…だあがが人殺しだ。てめえには命を助けてもらつたこと、感謝して欲しいくらいだぜ」

ぐりぐりと靴で踏みつけられ、右頬が擦れる。

「くつ…。なにが命を助けただ。君は罪もない人を一人も殺したじやないか」

「馬鹿いえ。俺が助けてやつたんだよ、医者。それより、てめえに今すぐ診て欲しい奴がいる。こい」

高圧的な物言いに、サムスンは屈しないといわんばかりに睨みをきかせ、抵抗した。

「嫌だ！僕は人殺しの言つことなんかは聞かない！君の診て欲しい人だつてろくな奴じやないんだろう！だつたら僕は死んでもそんな人診ないからな！」

サムスンの必死の抵抗だつた。しかしエリクソンの一言で、その言葉は180度覆させられることになる。

「ほお…。地べたに頬なすりつける人間がよくもそんな口をきけたもんだ。大事な村人を助けるのがアンタの仕事なんじゃねえのか

よ

「何が言いたい

「あんた、ナタリーって奴は知つてんだろ？ 一人で気丈に振舞つて、その反面よくべそかいてる女だ」「

ナタリーという名を聞いた途端、サムスンの顔色が変わる。ナタリー・ナタリー・ライアードのことか？

「思い出したか？ そいつが今負傷してる。お前の仕事だ。はやく来い」

ヒリクソンは身を翻し、ついてくるように指示する。サムスンはそういわれては彼についていくしかない。そろそろと立ち上がり、彼についていく。その途中で殺された二人の遺体を確認しようとしたが、あとかたもなくなっていた。

（どういうことだ）

サムスンは目を見張った。二人の遺体はどこに？ まさか幻だつたとか？ いや、そんなはずはない。確かに一人は目の前で殺されたのだ。

「さあ、君……トーマスとボブは、一体どこに？」

どこに一人をやつたのだ、といつて訴えると、彼は。

「あの下衆どもなら今頃地獄じゃねえの？」

氣味の悪い薄ら笑いを浮かべて、彼は言つ。ぞくりと背筋に悪寒がはしつた。

（な、なんだ。この人は。まるで悪魔だ）

不気味に笑う青年に、サムスンはおじけづくばかりだ。すっかり固まってしまったサムスンに、少し脅かしそぎたか？とエリクソンは少し声を和らげて言った。

「とにかく、ナタリーが怪我をした。俺じゃ診れない。代わりにあんたが診てくれ」

声のトーンが一変して、サムスンはハツとなる。

「……。分かった。すぐに診よう」

そうしてライアード家を訪ねてみたところ、彼女の身体は酷いあらさまだった。全身は無残にも痣だらけ。どこもかしこも身体を強打していく、骨は奇跡的に折れてはいないものの白い肌は青痣の色に染まり、診てるこっちが痛々しかった。首には絞められたのでもろう、手の痕がくつきりとついていた。誰かが暴行を働いたに違いない。

（誰がこんなことを）

真っ先に思いついた犯人はすぐそばにいる青年だった。

「君は確か、ナタリーの恋人だっけ？」

「そうだ」

青年はぶっきらぼうに答えた。

「彼女のこの怪我はどう見ても誰かに暴行を受けたとしか思えない。君は彼女の第一人者だ。彼女はどこに倒れていたんだい？僕が呼ばれて駆けつけたときには既に君に自室に運ばれていたようだが……。

君が彼女を発見したとき、犯人らしき人は見たのかい？」

「…。見てねえよ。俺が倒れてるコイツを発見した。随分怪我して
るみたいだから部屋に運んだんだ

」

「本当に？もしや君が犯人だつたりするんじゃないか？恋人に暴行
を働く男は、…悲しいけど、現実にはいるからね」

サムスンはエリクソンが犯人なのではないかと疑っていた。ほん
の少し前にトーマスを無残なやり方で殺し、さらにはボブの命まで
絶つた。人を殺すことにためらいのないこんな恐ろしい男が、恋人
である彼女に何もしないはずがない。まして今の会話からして負傷
した彼女を労わる様子も、彼女をこんなふうにした犯人に憤りを見
せるような態度もとらない。本当に彼女の恋人なのか？恋人の怪我
を嘆きもせず、淡々と話す様子も怪しい。サムスンの中でエリクソ
ンの犯人疑惑は膨れ上がるばかりであった。

「恋人とは言つても、君は彼女を愛しているのか？とてもじゃない
が、僕にはそうは見えない。…君が犯人なんじゃないのか。最近彼
女とトラブルがあつたとかはないか？本当に君じゃないのか？」

「……」

サムスンの質問にエリクソンは口をつぐんだ。トラブルがあつた
といえばあつた。彼女を泣かせるようなことはした。けれどそれと
これとは別問題。全く関係ない。

「トラブルなんてなんも無いし、俺はコイツを傷つけてはい
ない。お前は早く診察しろよ」

「……わかってはいるが」

まだ疑いの消えない眼差しを向けてくるサムスンに、ヒリクソンは深く溜息をついた。

「あんたは……あれだろ？ セツキ俺が人間を殺つたから俺を疑つているんだろう？ だが違うぜ。セツキアイツらを殺つたのはそれなりに理由があつたからだ。医者やつてんだつたらアンタにもわかつてるんじゃないのか？ テーマスとかいう奴は既に死んでいた。なのに動いた。おかしいと思つたんじやないのか？ 普通死んだ人間が生き返るか？ そんなわけねえよなあ？」

「それは……」

ヒリクソンの言つとおりだ。サムスンは騒ぎたてる村人の中でいち早くその異変に気づいた。脈もない。体温も感じられない。明らかに彼は死んでいた。だが、再び動きだした彼に生氣は感じずとも、本当に生き返つたのだとしたらその命を医者として、人間として再び死へと誘つことなどできない。

「変だとは思つたさ。けれど、せつかく動き出した命の火を絶やすなんて、僕にはできない」

「はあ～ご立派なことだな。そんなこと言つてると、あんた奴らのいい標的になるぜ？」

「君はセツキから何を言つているんだ？ 奴ら？ テーマスとボブのことか？ 僕は君の言つてゐることが全く理解できない」

彼らを殺したこと感謝してほしいと青年は言った。意味が分からぬ。彼らを殺されて嬉しいわけがないからだ。

「あんたは…、知らないのか？ちんけな村だからなあ…。特別に教えてうやるよ。いま世間を騒がせている奴らの手にかかつた人間の末路がアレ。それだけだ。奴らは人間の生き血をすすり、仲間を増やすのさ。あの一人は噛まれた時点で奴らの毒牙にかかり、人間としては終わつたんだ。だから殺した。これ以上人間の数を減らされても困るからな」

「……」

（毒牙。生き血？）

暴走したトーマスはボブに噛み付いていた。あれは腕を折ろうとしていたのではなく、ボブの生き血をすすりつとして襲つていたというのだろうか。

（そんな恐ろしいことが、あるのか…？）

「おしゃべりは終わりだ。…なにか考えているみたいだが、あんたの仕事は今はそうじやないだろう？医者としてとつとと働け」

深まる謎に神経が集中してしまい、目の前の患者の診察がすっかりとまつてしまっていた。

（今やるべきことはナタリーの傷を癒すことだ）

そう言い聞かせ、彼は黙々と彼女の身体を調べ、処置を施したのである。

「よし。これで彼女が気がつけばあとは回復していくはずだ」

処置を終え、一息つくと、ヒックソンは黙つて部屋を出て行こう

とします。

「君、どこに行くんだ。ナタリーには頼りになる身寄りはない。恋人である君がいなくなつてどうする」

一応引き止めてみたものの、彼は「仕事だ」と言つて出て行つてしまつた。

（仕事…？恋人より仕事を優先させるのか。なんて人だ）
とはいゝ、意識のない彼女を一人にはできない。せめて彼女が目覚めるまで、と、彼女の親友であるカトリアを呼ぶことにしたのである。しかし、友人が酷い暴行をうけたと知つたら、同じ女性のカトリアは酷く傷つくかもしだれない。ここは彼女のためのもと、ナタリーが事故にあつたと嘘をつくことにしたのだつた。

「あ、あの、先生？」

ナタリーの声にハツとした。ヒリクソンといつ青年に会つてからというもののどうも考え方ばかりしてしまつ。

「あつ、ああ、ごめんね。変な質問しちやつたね。いや、なんていふか彼、かつこいいよね。さつき会つたんだけど人間じやないみたいに綺麗な顔してゐるよね。あつ、そうそう、彼、仕事があるとかでどこかに行つちゃつたよ？忙しい人なんだね。君がこんなめにあつてゐるのに。あつ、また余計なこと言つちゃつたかな？本当ごめんね」

「い、いえ…」

(なんだ。そういうことか。びっくりしたあ)

ヒリクソンの正体がばれていけない。もしかしたら、自分だけではなく彼も巻き込んでしまうことになる。それだけは嫌だつた。

「一応診察も終わつたし、僕は病棟に戻るね。他にも患者さんがくるかもしれませんし。どこか痛むんだつたらすぐ言つんだよ?」

「はい。先生、ありがとうございました。お世話になりました」

「うん。じゃあね。あ、ひとつだけ。彼に会つたら僕があやまつていたと伝えてくれないかい?君を暴行したのは彼じゃないかと疑つてしまつたんだ」

「え! いいえ。違いますよ」

彼女の反応にやはり違つたか、と深く反省する。

「いや、申し訳ない。じゃあね。ナタリー。お大事に」

「はい」

そして一人になつたナタリーはベッドに潜り込み、一休みすることにした。

(ヒリクはないのか。仕事つて言つてたみたいだけど…。それつてアレ退治のことよね。今度は遅れてくんないつて言わなきや。そうだ。くるのが遅くなつてあたしが怪我したお詫びをせなへりや。そりねえ、何にしようかしら)

布団に潜り込み、どうしようかとくすくす楽しみながらナタリーは思案にふけつた。ヒリクソンのことだ。わざとお詫びをさせよう

としても言つ」とは聞かないだろう。それでも試して言つてみよう。
また喧嘩になるかも知れなけれど。

ナタリーがすうすうと寝付いたとき、家の外では騒ぎが起こつていた。早朝に起こつたトーマスの死亡、そして生き返つたトーマスの暴走の件で、落ち着いた村人たちが屋外に出て集まり騒いでいたのだ。理由はトーマスとボブの二人の行方が分からぬというもので、サムスン、トーマス、ボブを置いてそれぞれの家に逃げ込んだ村人们は、その後三人がどうなつたか誰も見ておらず、ただ外に出てみると現場には三人ともいなくなつていたので一体何があつたのかと口々に意見を言い合つていてるのである。トーマスは悪い憑き物がついて操られていたのではないかとか、ボブは悪魔にとりつかれたトーマスに食われてしまつたのではないかとか。根拠のない空想話を繰り広げては恐ろしいと恐怖していた。

そこにちょうどナタリーを処置し終えてサムスンがとおりかかる。村人们は彼を捕まえると、あんたは無事だったのか、とか、二人の行方が分からぬ、何があつたか知つていてかと大勢でとり囲んで彼に問うたのだ。

「先生、あんた、二人と一緒にいただろ？あの後どうなつたんだ？何があつたんだ？」

自分たちは逃げたくせに、無償に知りたがる村人に少々呆れたサムスンだが、彼らは恐れをなして逃げ出しただけのこと。誰だつてわが身の命が一番可愛いに決まつていて、自分だつてそうだ。もし暴走したトーマスに襲われたのが自分だつたら、同じように逃げることを優先させるに決まつていて、人間というものはそうなのだ。

「どうなんだ？先生。あんたがはトーマスをとめようとしていたよな？それで、どうなつたんだい？」

「どう…と言われましても……」

サムスンは返答に困った。彼らの行方は自分だって知らない。突然現れた青年に鳩尾をなぐられ氣絶してしまったのだから。だから、氣を失っていた間になにがあつて一人の遺体は消えてしまったのかは謎だつた。だが、考えられるのは一人を平氣で殺した青年・エリクソンが何かしたとしかサムスンには考えつかなかつた。

（彼は恐ろしい人間だ）

吐き捨てる暴言の数々も、いとも簡単に人間の頭蓋を潰したあの腕力も、彼の外見からは想像もつかないような身体能力になみなみならぬ力を感じ、サムスンは恐怖した。そして、気がついたとき、二人の遺体が消え去つていたことを尋ねたときの、薄氣味悪い笑み。

『あの下衆どもなら今頃地獄じやねえの?』

「今思い出しても寒氣がする。あれは、人間の目じやない。
まるで魔魔だ

「先生、二人のことでなにか知つてゐるのかい?ねえ、そりなんだ
ろ?う?なにか言つておくれよ」

顔色の悪いサムスンに何か感じとつた婦人は、問い合わせて彼を追い立てる。彼女はボブの妻、リダだつた。ふくよかな身体の大きな婦人で、ボブよりも強く、家庭では彼を尻にしいてるとの噂が絶えない元気な女性だ。彼女は騒ぎになつたときは家で朝食の準備をしていて、現場にはいなかつたそうだ。やじうまで外に飛び出していつたボブが、すぐに帰つてくると軽く思つてゐるのだろう。しかしボブは帰らぬ人となつてしまつたのだ。サムスンはボブがどうなつ

たか知つてゐる。彼は行方不明じやない。ヒリクソンに殺されたのだ。

リダと顔を見合わせると、彼女は涙を浮かべ、今にも泣き崩れてしまいそうな顔をしている。夫がいなくなつたと聞いて不安なのだろ。その悲痛な叫びがサムスンにもひしひしと伝わつてくる。（行方不明か。それならまだどこかで生きているかもしないという希望がもてたのに……）

本当のことと言つべきか否か。

サムスンはすばやく思考をめぐらせたが、自分の言葉を信じてくれるかも分からぬ。なにより、不安定な今の彼女に彼は殺されたということを伝えるのは、サムスンには辛過ぎた。だから。

「……いいえ。知りません。なにも知りません。僕は気を失つていたんです。途中で鳩尾を殴られて、僕は氣絶しました。目が覚めたときには一人は既にいなくなつていましたから…。僕にも分からぬのです」

（嘘だ。僕は知つてる）

精一杯何も知らないと嘘をつくと、彼女は一瞬腑に落ちない、という表情をしたが、分からぬといつてゐる以上何もいえない。そうかい…と暗い声でそうつぶやくと身を翻してとぼとぼと歩いていつてしまつた。

（「めんなさい」。ミセス・リダ。僕はあんな酷なことをあなたに告げることはできそつにない）

心の中で謝罪すると、リダと同じよつに群がつていた村人たちは騒ぎたてすまないねと言い残して散り散り去つていつた。皆、後姿か暗い。

（ごめんなさい。みんな。でも、このことは知らないほうがいいと思うんだ。あんな悪魔みたいな男のことも、一人の死も）

胸の中に鉛が溜まる思いがする。重くて苦しい。だがそのほうが

いい。サムスンは眞実を胸に秘め、身を翻して診療所に向かつた。

その日、夜まで一人の捜索は続いたが、誰も一人の手がかりをつかむことはできなかつた。

「どうにかしてあの高飛車バンパイアにお詫びをさせたい！あたしはそれ一心で思案し、それが楽しくてワクワクしてしまい、テンションが上がつてなかなか寝付けないでいた。一番エリクにやらせたいのはこれ。有り得ないけど、エリクを床に土下座させて「駆け付けるのが大変遅くなり、ナタリー様の美しいお身体に傷をつけてしまったことをどうかお許し下さい」って言わせて、あたしはどうするかって言つと……」。

もちろん許してあげないの！

土下座するエリクの頭を踏ん付けて、「出来の悪いバンパイアはあたしの用心棒には必要ないわ！」なーんて言つて、お払い箱。バイバイ。エリク。もう戻つてこなくていいよ。あ、ついでに世界中の下級バンパイアもやつつけて帰つてよね。人間界にはかなり不必要だから。

……てな訳で、あたしは全身打撲したせいで頭も一時的におかしくなつてたんだと思う。そんな変な妄想を布団被りながらげへげへ考えていたんだから。

……気持ち悪いわねあたし……。でもそんな妄想もいつの間にか飽きて、気づかぬうちにぐつすり寝入つてた。当たり前だ。身体は人生で一番傷ついて、休息を欲しているのだ。夢なんて見ないくらい深い眠りについて、時間の感覚も分からぬくらい眠つたと思う。気がついた時は多分夜中。外、真っ暗だつたから。部屋のカーテンは閉まつていて、誰かが閉めてくれたんだあつてぽけーつと見つめてた。まだ眠氣で覚醒してない頭で考えて、喉が渇いていることに気づくのに十秒くらいかかるてしまった。水が飲みたくてあちこち

痛む身体を押さえてベッドから降り、キッチンに向かつて足を引きずりながら歩き始めた。全身じんじん痛くて部屋のドアノブまで歩いていくのも一苦労。いつもの元気がないぶん、扉が遠く感じた。扉があたしから遠ざかつていってるんぢやないかつて思うくらい、遠く。やつとの思いで辿りついたけど、キッチンまでの道のりは長い。一番難関の階段を降りて、広いリビングを横切つてやつとキッチン。イメージしただけで疲れる。でも頼れるのはあたしだけだから。一人で生きてくことはそういうことだからって魔法のように唱えて、ガチャつて扉を開けた。あたしはその時扉に重心をかけすぎて勢いよく開いた扉に合わせて前にズッコケてしまう。前に倒れる身体を咄嗟に庇つた腕や足から、衝撃が走り、全身に痛みが走つて廊下で小さく縮こまつた。あちこち痛くて言葉も出ない。なんだか自分が凄く惨めに思えて、少し涙が出る。水を飲みにいくことすらこんなに苦労するなんて。

少し泣いて顔をあげると周りは夜だから真つ暗。廊下の隅の方は暗くて何にも見えない。暗い、真っ黒な世界はあたしを襲つた奴を連想させる。そう考えると何もかもが怖くなる。家の中が安全だなわけない。あたしが襲われた時、どつちも屋内だつた。一回目は教會の中で。一回目は家の中。まさか自宅で化け物に襲われるなんて誰が思うだろ。危険は外だけにあらず。あたしは家の中についても、外についても安らぐ生活を送れない。不本意だけどエリクがいないと奴に出てわした時、あたしだけじゃ絶対太刀打ちできない。あたしじゃ蚊ほどの抵抗も出来ないのに、エリクは片手だけで遊ぶように余裕で奴をやつつけてた。雲泥の差つてこういうことを言うのね。だからエリクはあたし（人間）を馬鹿にするのかも。力の差つてやつをようくしらしめてくれたお陰であたしはその事、よく分かったわ。…ようくね…。

自分で自分にそつ納得させたら、胸の奥がズキッと締め付けられた。

（おかしいわ、あたし。冷静に考えたらエリクがあたしを助けてく

れたのはそういう当てつけだつたり、あたしの血が欲しいからだけに決まつてゐるに。なのに……）

『随分ぼろぼろにされたな……』

まるであたしを労るかのように優しく手を差し出してきた事が凄く嬉しかつたなんて。でもその理由がきっとあたしのことを、思つて、したことじゃなく、自分の「利益のため」にしたのだとしたら、そう考えたらとてもなく胸が痛くなつて、体中の痛みなんかよりも痛い。この気持ちは何?どうしてあたしはエリクに、優しくされた、のが嬉しかつたの?そんなこと、エリクが本気でするはずないのに。

考えれば考へるほど彼の意図は読みとれなくて。訳の分からぬ感情に悩まされて、廊下で肩を抱きながらまた泣いた。今までこんなに泣くことも、誰かの仕草でこんなに悩むことも無かつた。最近の自分は何だか弱い。ナタリーはそう感じていた。エリクソンという圧倒的強者が現れてから、あたしは弱者として振り回されっぱなし。エリクがいなかつた時は、精神面では村の中では誰よりも強いと思っていたし、人一倍頑張つて強く生きなきや、て思つてた。弱い自分を人に見せてはならない。見せたらあたしの強みとしてる部分が全部消えて無くなつてしまつ。そしたら天国の父様と母様が心配する。カトレアもきっと心配する。だから駄目。あたしなんかのために他の人に迷惑をかけちゃ駄目。そう思つて強く強く、つて。

なのに、エリクはそんな必死なあたしをことじとく攻撃して、ボロを出させようとしてくる。あたしの築きあげた強い精神を崩して、人間の弱さを突いて、どんなに気張つても誰かと手をとりあわなきや生きていけない人間なのだと認めさせようとしてくる。俺にはかなわないつて。そして弱者のあたしはやがて強者に助けを求め、強者の足元に縋り付くのだ。

（あなたの思惑どおりよ。あたしはあなたの力無じじゃ生きてけな

い弱い人間。そう認めさせたら、あたしは嫌でもあなたに縋り付いて助けをこうでしょう？ そうしたら盟約通り。契約成立よね。あたしはあなたのために生きる家畜も同然だわ）

だからあの優しさもきっと偽り。あたしを盟約に縛りつけるためのひと芝居。でもやつぱりそう考えると悲しくなつて。訳がわからぬ。また泣きたくなつて、喉が渴いてるはずなのに瞳からはボロボロと大粒の涙が零れてきて……。

辛い。こんなに辛いの初めて。誰かに助けを求めてくなる。どんなに頑張つても、あたしは弱い人間だから。誰か、来て。そばにいて。

「何やつてんだよ。こんなところで」

突然ふつてきた言葉。

なんどよりもよつてこの人なんだろう。あんまり会いたくなのに。この人には屈したくないのに。弱い所見せたくないのに。ああ、最悪だ。今のあたしはエリクから見て最高に大笑いしたくなるような状態に違ひない。水が飲みたいのに身体が痛くて動けない。その上寝間着姿で廊下で泣きじやくつて顔はぐぢやぐぢや。

最悪

（笑えばいいじゃない。いつもみたいに高圧的な口ぶりで。最高に惨めなあたしをののしけば？ いつもあたしに言つてたように。お前なんかそうやって地べたを這いつぶばつて生きる家畜だつて。言えばいいじゃない）

もう、あたしは弱い部分を隠そうともしなかつた。もつこの時、あたしは自暴自棄になつていた。

隠したつて仕様がない。笑えばいい。笑え。笑え。呪文のよう

に繰り返す。

予めそういうことを予想しておかないと、本当にそつなつた時のダメージが大きくなつてしまつから。でも。

エリクはあたしの予想に反して何も言つてこなかつた。そしてゆつたりとした歩調で廊下に座り込むあたしの傍まで来ると、何も言わずにあたしを抱き上げ部屋に戻そうとしたのだ。

「さやあ。やだ。降ろして。あたしは行かなきやいけなきや所があるの」

突然の行動にあたしは驚いて痛む身体をばたつかせる。

「つぬせー。耳元で騒ぐな。何が行く所があるだ。大袈裟な。動けないで泣いてたくせに。大人しくしてろ」

そう言つてあたしの頭を軽く小突いてあたしを黙らせる。

「…………。おひしてよお…。あたし水飲みにいきたいだけなんだからあ……」

駄々っ子のように身体をばたつかせて抵抗するあたしは本当にかっこ悪い。でもエリクはあたしが抵抗しても降ろしてくれなくて、ようやく離してもらつたと思つたら、そこはベッドの上だつた。

そしてエリクは静かに踵を返してどこかに行つてしまつ。何だつたの？

また布団を抜け出して部屋を出て行つたらちよづき部屋に

入ってきたエリクに捕まつて、またベッドに連れ戻された。

「つたぐ。寝てろつづの。ほら。水」

ぶつきらぼうに差し出されたのはコップに入った一杯の水。あたしのためにもつてきてくれたの？

驚いてなかなか受け取らないあたしにじれったさを覚えたのか、エリクはあたしの手をとり、無理やりコップを手渡した。

「……ありがと……」

素直にお礼を言つて、コップの中で揺れる透明な液体をじっとみていた。そしてコクリと喉に流し込む。泣いて枯れた喉に冷たい水が通つてからだの芯から全身が潤つていく感覺だ。ただの水なのに、すごくおいしい。

「落ち着いたかよ

「……うん」

まだ目を真つ赤にして泣いてるあたしの様子を伺いつつ、エリクは一気に飲み干して空になつたコップを奪い去ると、あたしを横に寝かしつけてぼそりと言つた。

「……な。……も……て

「……え？」

聞き返したときにはもうエリクは部屋を出て行った後で。エリクって呼んでみたけど、彼は戻つてこなくて。隣の部屋の扉がパタンって閉じる音がした。自分の部屋に戻つたみたい。あたしはゆっくり体を横にすると布団をかけてしばらく天井を見つめていた。

あたしの頭はエリク言葉を信じられない思いでずっと繰り返してた。

だつてエリクよ？人間のこと馬鹿にしてて、指図されたらキレ

すぐ怒るような奴なのよ？

でも、その言葉は、あたしの耳には彼の初めての謝罪の言葉に聞こえた。あのエリクが謝罪なんてまさか。ううん。でもちゃんとした謝罪の言葉だった。幻なんかじゃない。

「…悪かつたな。怪我させて…」

思ひもよらない言葉に、わざ今までのあたしの悲観的な考えも涙も一斉にふっとんで、あたしはただ目をぱくぱくさせているだけだった。

奇妙な朝食

ぐ～… れゅるるるる…。

「…………。」

情けない音が部屋に響いては消えた。

「お…お腹すいたあ」

あたしは今ベッドの中。たつた今起きたばかりで、それと同時に急激な空腹に情けないお腹の音を鳴らしていたところ。それもそのまま。あたしは昨日から今朝にかけて眠つてはばっかりで何も栄養になるものを口にしていないからだ。口にしたとすれば、昨夜エリクがもつてきてくれたお水一杯。喉は潤つたけど、お腹はちつとも満たされていない。満たされても朝になつたらお腹は空くんだけどね。

さて、どうしようか。

「…………。」

「あたしが作るしかないじゃない」

朝方からカトレアが来てくれるのを待つとかちよつと考えちゃつたけど、やつぱり人に頼ろうとするのは良くないと思つた。助けてもらえるのは確かに嬉しいけど、頼つてばっかりじゃ申し訳ないしこんなあたしのためにわざわざ…すみませんつて考えてしまうから。それに朝から来てもらおうだなんて甘つたれもいいところじゃない?

皆人それぞれ生活のサイクルがあつて、特に朝なんて大忙し。そんな時に他人の世話をなんて。うん。

やつぱり悪い気がする。

あたしも一日休んだし、もしかしたら昨日よりは身体もマシになつてるかもしないし。

カトリアはまた来てくれるつて言つたけど、朝ご飯くらい自分でなんとかしてみよう。

ナタリーはそう決意し、思い切つて上体を起こしてみた。正確には起こしそうとしてみたで終わつたのだが。

「…………痛い…………。」

身体を起こしそうとほんの少し、ほんの少しだけ筋肉に力を入れてみただけだった。身体を横にしていた時にはあまり分からない、激痛が背中や首にはしつたのである。ナタリーはすぐに横たえた。やわらかい布団に沈み込む。

「なにこれもう…………、最悪」

ナタリーはこの痛みに耐えて、また起き上がるひつと試みた。ズキズキ痛みはするものの、空腹のほうが勝つている。

「なにか食べないと死んじゃう……」

大げさだが、ナタリーはそのくらい空腹を感じていた。

「『』はん食べたい……。お腹すいた……。」

ぶつぶつどうせん... じせん... と連発しながらやつとのことで起き
上がる。その時隣でガタリという音がした。思わずびくつと身体が
はねる。

ナタリーは咄嗟に音のした真っ白い壁を見つめた。一枚の壁で隔てられたその先はエリクソンがいる（出かけて留守のときのほうが多い）。

また何かやらかしてゐるのかしら。

しかし、前に彼の部屋をのぞいた時は綺麗に整えていて、使っていた形跡がないくらい綺麗だった。

何が物を落としたかと
じだらう。 徒の足音が少し大きが
たとかそんた感

が 取るに足らなければ、 それ思つた。
。

エリクソンの叫び声とともにドスン！と大きな物音がした。

な、なにしてんのよ。

盗み聞きする趣味はないが、何が起こっているのか気になる。身体が充分に動かせない今、余計に気になつてしまふ。

なんだかうへー、ナタリーはうつと耳を壁に押し付けてみた。

「…………キユイー！」

キユイ?

ヒリクソンの声？にしては甲高すぎて気持ち悪い。ナタリーにはその声が小鳥とかリスとか、小動物系の鳴き声に聞こえてならない。ペットでも飼う気だろうか。いやまさかヒリクソンに限つてそん

なことは……。

ナタリーは確かめるよつてひつてひつて一度耳を壁にくつつけた。

「キューイ……キューイ……」

相変わらず小動物系の甲高い鳴き声が絶え間なく聞こえてくる。その様子からしてあせつてこるよつだ。

「てめえ、おとなしく死ね！喰われるー！」

（え……）

物騒な声が聞こえてくる。

ちょっと待つて。エリク何やつてるのよ。まさかあいつ、可愛い小動物を捕まえて頃殺す気！？

ナタリーの頭の中にはもやもやと可愛い子リスがエリクに尻尾を捕まれて鳴き叫んでる様子が思いうかんだ。

（いやあああ！リスが！リスが死んじやう！あのバンパイアに殺されるー！）

これは大変だと、ナタリーは壁を叩いて隣にいるエリクソンに向かつて大声で叫んだ。

「あんたー！何やつてんのよー！可愛い小動物捕まえて苛めてんじやないわよー！」

すると壁越しに返事が返つてくる。

「は？小動物？なに言つてんだお前」

「いいから早く！その子を離しなさいー！」

「馬鹿かお前。せつかくの食料みすみす逃がすか」

「食料つて…。子リスを食べる奴がどこにいんのよーー！」

「何勘違ひしてんだよお前。」「

気がつくとキューイキューイと鳴っていた声が聞こえてこない。

(まさか……殺されちゃったの……?)

子リストが……なんの罪もない子リストが……。

ナタリーの頭の中には非道なバンパイアの手の平の中で息絶えた

子リストの映像が。

「最低！最低最低最低！」

「うるせーな。なにが最低だ。感謝して欲しいくらいだ

「感謝して欲しいって、何？まさかそれをあたしに食べさせる気じや。いやよ、小動物なんか食べないわよ。なにが感謝よ。馬鹿！この馬鹿バンパイア！」

「失礼な奴だな。昨日はめそめそ泣いてたくせに」

バタンと音がして、スタスターと足音が聞こえてくる。

そしてノックもせずにエリクソンは勝手に扉を開けて中に入ってきた。

「いやーーもうーーリストの死体なんて見たくない！」

「だからさつきから何言つてんだよお前は。リストじゃねーし。これだ。よく見ろ！」

そう言つて田の前に差し出されたのは気持ち悪い口のついた椰子の実のようなもの。まさか、小動物だと思つてた鳴き声つてこれの発してたものだったの？

「ひつ」

気色悪い物体を田の前に出されて田を伏せた。

「気持ち悪い！捨てて！」

「捨てるかー。喰つんだ。つーかお前が喰え。」

Hリクはその気持ちの悪い木の実についている口を手でもぎ取ると、やらないに一つに割つて斤方を差し出してきた。中身は果物のよくな果肉がついていて、でも気持ちの悪いそれは濃い紫色をしていた。どう見ても食べ物には見えない。なかなか受け取ろうとしないナタリーに無理やり片方を持たせて、自分は部屋にあつた椅子をひっぱり出してそこに座ると、長い脚を組んでおもむろにそれ食べ始めた。シャクシャクと音を立てて食べる様子は、りんごでも食べているような感覚で。Hリクはお前も早く食えよといわんばかりの視線をなげかけながらそれを食べている。

「…… いらないこれ。」

「いいから喰え」

「不味そうだし、身体に毒つて感じの色してるわ

「毒だつたら俺食つてねえし。」

「でもやつぱり……」

「…… いらない」と言いにかけてお腹がぎゅるん…と鳴つて、顔が熱くなるのを感じた。Hリクはもうほとんど食べかけていて、美味しそうに平らげてしまった。あたしはもう空腹の限界で、その気持ちの悪いものを勇気を振り絞つて少しだけかじつてみた。

シャク…と歯切れの良い音がして、次の瞬間芳醇な甘酸っぱい香りが口いっぱいに広がった。

まるで苺でも食べてるような感覚だ。

「あ…… おこしー」

つい口に出してしまった。こんな氣色の悪いものを食べさせられて美味しいなんて言いたくなかったけど、空腹感に負けて食べてみたら本当に美味しかったから。

あたしはエリクが見守る中、シャクシャク音を立てながら少しづつ食べていった。

食べ終わつた後、ひとつ疑問に残ることがあった。

それは。

「なんでエリクがあたしの世話をしてんの」

「別に」

（出た。別に。どうせあたしには分かってるんだから。あなたがどうこうつもりでこんなことするかなんて）

「あの…。昨日もだけど、ありがと。助けてくれたり、お水もつてきてくれたり…」

「……」

ああ、あたしは何を言つているんだろう。御礼なんて言つてるしきつとこれは借りだ、とか言つて後からあたしの血を絞るとるに違いないわ。

「そりいえばあなた、最近血、飲んでないけど大丈夫なの」

「ほお。吸われたいのか」

お礼言つたら黙つたくせに、いつちには食いついた。現金な奴。

「吸われたくは無いけど、そういう盟約だもの…。いいわよ。少し
ぐらー」

自ら襟をまくり首筋を差し出した。その行動にエリクが目を見張る。あたしは今回は別に吸われてもかまわないって思えたからじつと動かず彼に首筋を差し出した。ナタリーの首にはまだくつきり残る手形と、エリクがつけた赤い文様が入っている。エリクは眉をひそめ、しかしうつくりと顔を近づけてきた。お礼のつもり、だった。

「いい心構えだが、これでもいいってのか

「？」

不意に首についた手形に合わせるように、エリクがあたしの首を鷺掴みにする。

「ううう……！」

電流がはしつたように痛みが走る。首が絞まるほど強く掴まれてゐわけじやない。軽く握りしめるような感覚。なのに苦しくてものすごく痛く感じる。化け物に一番痛めつけられたのは首だった。本当に死ぬんじやないかつて思つてから首を絞められて……。また怖くなる。

パッと首から手が離れて、苦しみから解放される。いつの間にか目じりに涙が溜まっていた。

「たつたこれだけでそんだけ痛そりにしてたら、俺が牙を突き立てた時にや、お前死ぬぐらい痛いんじやねえの？」

エリクは長い脚を組み替えて言う。確かにそつかも知れない。すゞく痛かつた。

「……」

「別にお前に心配されるほど俺はヤツワジやねえし、血ぐらこじまらく吸わなくたって生きてける。余計なこと考へる暇あつたらひとつ治せ」

ヒックがあたしの頭をポンて叩いた。

「…………うん。…………わかってる」

わかってる。わかってるわよ。
早く治して、いつもみたいに血を思つくり吸いたいものね。
でも、そんなんふうにされると、あたし何か勘違いしそう。優しくされてるなんて思つやけりでしょ。違つて分かつても。

「なるほど。もうこうしておいたのね」

「ああ。もうこういった…………く？」
「え？」

綺麗な、透き通つた声が聞こえたよつた気がした。空耳つて思つたけど違つみたい。

「だ、誰？」

いつの間にかあたしの部屋の中に立つていたのは長く白い髪。月光が人の形をとつて現れたのではないかと見まつほどの透き通つた柔らかな肌。紫水晶のような瞳。服は髪と同様、純白のフリルのはいつたドレスを身に着けていた。ドレスと言つてもパーティードレ

スというよりワンピースといったほうが近い。どこのお姫様だらうかと思うほど美しいその人は、あたしとエリクを交互に見てにっこりと微笑んで見せた。

「こんにちは。ナタリーさん」

え…。どうしてあたしの名前…」

あたしの名前をぴたりと言い当てた美女は、今度は頭をかかえて
いるエリクに向かつて話しかけた。

「ナタリーさんって、人間でしたのね。どうりでお話していくださらないわけですね」

うふふ、と悪戯っぽく笑う美女に、何故かエリクは困ったような顔をしていて。頭が?になってるあたしには何がなんだかわからな
い。

「あの、どちら様ですか？」

「あら。わたくしのこと教えていませんのね。わたくしシルビアと言います。エリクソンの婚約者ですわ」

風変わりな彼女

親愛なるお父様、お母様

一人が亡くなつてからはや一年。ナタリーは相変わらず元気にはいます。規則正しい生活と人としての善良の心を忘れず毎日を送っています。悪いことは一切してません。

なのに何故でしょう？

一体いつからでしょうか？

清く正しく生きてきたつもりなのに、これは神様の悪戯なのでしょうか。

あたしの周りには人ではない人達が寄つてくるようになりました。今日もこれまた綺麗な女のバンパイアの方が一人家にやってきました。しかもすでに家に生息中のオスのバンパイアの婚約者なのだとおっしゃつてます。

はあ、そうですか

としか言いようがないのですが……。ふう

お父様、お母様、どうか教えて下さい。次から次へと人外の人達に絡まるあたしは、これから一体どうしたら良いんでしょうか……

「ナタリーさん。ナタリーさん。」

「…………はー? はー?」

透き通る声に呼ばれて気がつくと、田の前には眉を寄せた心配やうにあたしを見つめる綺麗なお顔が。

ああ、どうやったあたしはしまじりく意識を両親のもとに飛ばしていたみたいですね。

相当ぽけーっとしてたんだと思つ。数メートルは離れた距離にいた彼女が、ベッドのすぐ傍まで来ていたのだから。

セリヤ そうよ。

ここ最近ヒリクソンに出来つてからといつもの心臓に悪くなるような出来事ばかり立て続けに起きて、心も身体もよつやく本調子を取り戻してきた頃にまた新しいバンパイアが現れるんだもの。（しかもいつの間にか勝手に上がりこんでいることが多いし……）

しかもヒリクソンの婚約者ですか。あたしと名ばかり恋人のヒリクソンの偽りではない、本物の彼女さんとかじやなく結婚相手ですか。人生の伴侶ね。そこまで進んでる人がいたのね。

なのにそんな相手がいながらどうしてこの男は平氣であたしの恋人なんかやつてるのかしら。

普通に考えて浮氣じゃない。

じの馬鹿。

ジロリと傍に腰掛けるHリクソンを睨みつけた。

でもあたしの睨みなど全く気づいていない様子で。この馬鹿は婚約者が来ているところに全く無関心。いつもの調子で退屈そうに欠伸なんかしてゐる。ちょっと…あなたの婚約者じやない。あんた相手しなきよ。

そう曰で訴えかけると、彼は視線に気づくが、何睨んでるんだと途端に不機嫌そうな顔つきになる。

もうひ、このお馬鹿は！

なんであんたがそんな顔するのよ。面倒事次から次へと降つてきて迷惑してゐるのせいひだつてば。

苛々しながら一人睨み合ひてゐると、クスリと笑みが聞こえてくる。

「二人とも、そんなに見つめあつて。ふふ、仲が宜しいですね」

「「まあ…？」」

Hリクソンとあたしは一齊に彼女の方に振り向く。

今の睨み合いが何故見つめ合いに見えるのか。おかしな[冗談はおやめください]。

それに仮にそう見えたとして、自分の婚約者が他の女と見つめ合つてて、嫉妬を感じるとかじやなくそれどころか逆にどうして嬉しそうに笑うのですか。

謎すぎる……。

「…あの…今は見つめ合つてたんじゃなくて睨み合つてたんですね」

「あら、それでもわたくしはHリクソンとそんなふうに睨めっこな

どした時がありませんから、親しいのかと思ったのですが。違いますの？」

おーおーおー。お姉様。

完全にズッコケてますよ。

全然違いますよ。

「いいえ。違います。ちょっと事情があつてエリクとは一緒に住んでますが、そんな親しい関係じゃないので、婚約者さんは安心して下さい」

最初からあたしとエリクの間にはなんの関係もない」とを言つておかなくては。そう思つて言つたのに。なのに……。

彼女、一瞬驚いたように大きく目を見開いたと思ったら、パアアッとあたしが目を開けていられなくなるくらいまばゆい表情にみるみる変わつていつて。

明らかに人が歡喜する時のような顔なのだけ……そんなに嬉しかったのかしら……ね？

ま、嬉しいか。

エリクが浮氣してたわけじゃな……って分かったんだし。

「まあ！ナタリーさん、エリクソンと一緒に住んでいらっしゃるの？」

……え？

なんでそこに反応するの？

そこは「良かった。安心しましたわ」とかじやなくて？

彼女と会話を交わせば交わすほど予想外の会話の展開にだんだん疲労がたまつてくる。

言葉は通じていないわけではないのに、自分の考える常識に当たって嵌まらなくてヤキモキする。

いやでも、同居してますなんて言つたら反応するか。

あたしは力が抜けるように背中から倒れてベッドに沈み込んだ。

ああ…少し休みたい。
ちょっと疲れた。

「じりりと体を横に倒すと、さっきまでそこにはいたはずのエリクソンはおらず、木で出来た簡素な造りの椅子だけが視界に入ってきた。何処にいったのだろう？」

田をぱちくりさせてそれを眺めていると、

「エリクソンは先程部屋を出て行きましたわ」

と綺麗な声が降つて、あたしは咄嗟に声の主のほうに振り向いた。いつの間に？！気配しなかつたけど…どうこか自分の密づらい自分で面倒みろー！

ふつふつと怒りが湧き上がつてくる。
しかし当の本人がいないのでそれもできやしない。

「あの、それならいいんですか？追いかけなくて」

そういえばエリクが出て行つたの気付いてたら何故とめないので

すかシルビアさん。

貴女の婚約者が出ていったんですよ?

「大丈夫ですわ。少し出掛けたのでしょう。そのうちすぐ戻つてきますわ。」

まるであたしを諭すかのように言う彼女。

彼がいなくなつたというのに寂しいとか、彼をおいかけるような素振りをちつとも見せない。

まあ、いつも勝手に一人で行動することが多い彼だから慣れてるのかしらね?

それにしても素つ気ない気がするんだけど……。

疑問に思つていると、彼女はあたしの心が読めるの?と問いたくなるくらいあたしの感じた疑問にぴったりの答えをくれる。

「Hリクソンを追いかけないわたくしが変わつていて。そう思つていらっしゃるでしょ?」

「…………」

ぴたりと言い当てられて咄嗟に言葉を返せなかつたあたしは馬鹿だ。沈黙なんて肯定以外の何者でもないではないか。

「わたくしは今日、エリクソンに用があつたわけではありませんわ。違う方に用事があつたこちらに来ました。何故わたくしがここへ来たのか、聞いてください?」

まるで頼み」とをするように胸の前で手をあわせて聞いてくる。聞いてくださる?つて……、初対面の人のそんな事情を聞いてもいいものだらうか?いや、普通は聞かないだろう。

というか、何故エリクじゃなくあたしなのか？って疑問があるし、
こういう展開つて、なんとなく話を進めたあと、それとなく面倒
くさそうな用件を頼まれてしまつ典型的なパターンじゃないか？つ
て思うんだけど……。（本とかで読んでもるね）面倒なことはご免
よ。バンパイアに関わった時点でもう沢山なのに、これ以上あたし
に何を求めるというのか。

あたしの人生はすでに狂わされているのよ？貴方達のせいだ！

あたしの夢みる人生つていうのは…この村で静かで平和に、村人
Aとして死ぬまで静かに生きていくこと。それともいい人にめぐ
り会えたなら、その人と一緒になつて子供を3人くらいつくつて平和
な一般家庭を築いく。

それだけの願いなの！

べつにお父さんとお母さんを生き返らせて！とか子供じみた無茶
なお願いなんて神様にはしていられないはんだからね！！

なのに、それなのに、それだけの願いすらも叶わないような気す
るのよ。Hリクに会つた時点で！

しかし、目の前でお願いのポーズをする女性をあたしが放つてお
けるはずもなくて。

「話を聞くだけなら……」

反射的に口走つていた。

もう馬鹿…………！あたしの馬鹿…………！

これだからバンパイアとの面倒事が絶えないのよあたし…

頭では分かつていてるのに、人間にせよバンパイアにせよお願いな
んてされたら「断る」が出来ないわ。 だつてこんな綺麗なお顔で
見つめるんだもの。

無理でしょ。

それに話を聞くだけみたいだし。それなら……ね。

「まあ！聞いてくださるの？ナタリーさん、なんて優しいのでしょうかー嬉しいですわ。ではさっそく……」

「ぱああー！」と彼女の顔が明るく華やいで本当に嬉しいです。
表情豊かね～。

と、思いながら抱いていた抱き枕をだきしめなおします。

そして彼女は今は空きになつた椅子に腰をかけると、ひとつ咳払いをして話す準備をする。

なんだかそんなに準備されると、これからそんなに重くて重い話をされるのかと不安になつてくるじゃない。

と、ここで彼女の田あたしの田がぱつぱつと畳むさぬ。
じゅぢゅそのお話とやらが始まるひじ。

「では、聞いてくださいな」

その静かで落ち着きのある気品のある声に、あたしの喉がゴクリとなる。

エリクという婚約者をよそにあたしに聞いて欲しい話つて、一体？！

彼女の話しつて？（一）

「実はですね、ナタリーさん」

彼女がコホンと咳払いをして言ひ。

「つるさい男がいないので静かな真昼の空間に彼女の声が響いた。

「実はわたくし、人間界にいるある男性に会いにきましたの。」

「男性？」

男性と聞いて秒速で思い浮かんだのはエリクソンだった。
だつてつい先刻婚約者だと言つていたし、男性だし？一応彼と会つて嬉しそうだつたし？

「それは、エリクのことですか？だつたら追いかけたほうが……」

咄嗟に出た質問だけど、彼女は首を横にふり、違つとだけ答えた。
じゃあ親戚かしら？もしかしたら友人とかかもしれない。
けれど、なんでその人に会いにきたことをあたしに話すのかは全くわからない。

「エリクソンじゃありません。その方は、わたくしのお慕いしていらっしゃる方なのですわ」

「え？お慕いって……。」

やや古風な言い方で一瞬考えちゃつたけど、それって好きって意味で、シルビアさんの好きな人は婚約者のエリクソンじゃなくて、

別にいるつていうこと?

「好きな人…ですか？」

そう返すと、彼女は少し頬を赤らめてしおらしく「そりですわ」と答えた。

へえ……。好きな人かあ。はにかんじやつて、恋する乙女つて感じでかわいいわねー。

少々照れて赤みを帯びた頬を隠すように両手で覆い隠す彼女が、その美しい容姿にプラスされてかわいらしい。と、悠長なことを考えていたあたしだつたけど、それって、ちょっとマズインじゃない??

婚約者がいるのに別に好きな人がいるなんて。いやまた。

あ！もしかしたら！

頭の中に何かがピーンときた。

これはインスピレーションつてやつじやないかしら！

これはまだ仮だけど、もしかしてシルビアさん、別に好きな人がありながら、実は家のために政略結婚させられそうになつてゐるかわいそうな人だつたりするんじゃ……??

ハツ！

そうよーでなきやあんな煩くて口の悪いエリクソンと結婚なんて考えないでしょ！

うんうん。それで、シルビアさんはどうにかこの結婚を取りやめにしたいんだけど、出来なくてあたしに相談してゐるんだわ。きっと。だって胸に恋心を秘めたまま好きでもないやつと結婚とか女にと

つては悲しすぎるもの！で、同じ女であるあたしに意見を求めるにきたつてわけね。エリクに言つたつてしようもなさそつだし。だいたいエリクが纖細な乙女心を分かるはずもないし。だったら、あたしに出来ることは彼女が身の内に隠している思いを聞いてあげることだわ。良いアドバイスが出来れば良いけれど……。

ええい！ともかく！

そんな境遇の人がいるのに放つておけるわけがないわ。
さあ。シルビアさん！とりあえずそのモヤモヤした気持ちを全部あたしに吐き出しちゃつてー……！

ガタリ

椅子が鳴る音が響く。

途中からだが、いつの間にかあたしの心の声は喉を伝わって言葉となり、外へと飛び出でていたみたいだ。

急に声を荒げたあたしに驚いて椅子に座つた彼女が身体をのけ反らせているのが見えた。

それと同時にふふと爽やかな笑みをたたえると、彼女はでは続きを。と言つて体勢を整えたのだった。

しかし、あたしの勝手な憶測がやはりただの妄想話であつてなく終わり、同時に鼻血が出るくらい恥ずかしくなるのもそのすぐ後だつた。

昼。

シルビアから逃げるよつにしてライアード家から抜け出したエリクソンは、村人の水資源となつてゐる井戸の縁に腰かけていた。ちょうど村の中央に位置するこの場所は、ささやかだが市場もあるため人通りが多い。昼の、日中で最も陽が昇る時間帯なので、子供らは駆け回つて遊び、大人達はその様子を見守りつつ各自の仕事に精を注いでいた。たまに井戸の水を汲みに村人が寄つてきて、男なら「やあ！」と気さくに声をかけ、女なら（村娘なら）エリクソンと目が合つただけではにかみ顔になりながらも「こんにちは」と挨拶は欠かさず水を汲んで去つていく。

どの村人も明るく前向きで生きる力に満ち溢れているのが特徴だつた。自然に恵まれ、綺麗な空気を吸い、穏やかにのびのびと出来る環境にあるからだらう。それが人々の心を落ち着かせ、住人の少ないこの村でも互いを思いやり助けあつて生きていこうといふ活力を与えてくれるのだ。

エリクソンはすつと背を反らして伸びをする。

昼の暖かい日差しが彼を照らし、その心地好さに欠伸が出た。

眠い。

帰つて一眠りしようか。

ナタリーが使っていいと言つたいつもの部屋を思い浮かべる。ナタリーの部屋とほぼ同じ構造で、部屋の向きが彼女の部屋と対称的になつてゐるあの部屋だ。

正直あまり使つてはいない。

寝るためにベッドだけは使つてゐるが、外に出かけて“例の奴ら”を狩り行つてゐることのほうが多いのでまったく生活感のない空間のままだらう。

それに何故かあの部屋で一人でいるより、階下に降りて昼間たいてい彼女がいるリビングのソファで寝そべってるほうが暇つぶしになるのでそちらの方が居心地が良い気がした。ソファも意外と良いものだし。

（ああ、でも駄目か……。シルビアがいるんだつた。きっとあいつは今頃、ベラベラしゃべってる頃だから煩くてまだあそこじや安眠できねえ）

リビングで寝そべっていたら彼女らの話し声が聞こえてくる。そうしたらきっと気が散つて寝付けない。

（静かな所行くか）

そう思い場所を移動しようと立ちあがりかけたエリクソンの身体にふと影が落ちる。

また村人が井戸の水を汲みにきたのだろうか？
だとしたら邪魔になるし、そろそろ避けるか。と、スッと顔をあげ目の前に立つた村人を見つめてエリクソンは固まつた。

「…………」「…………」

「………… やあ…………」

村人にしては珍しく元気のないか細い声。だが、彼が持つブロンドの少しクセのある髪と、碧の瞳という容姿にはとても見覚えがあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8708g/>

血の盟約

2011年3月5日13時49分発行